



## 教師用資料

### 【授業の進め方】

この資料は『人と社会をつなぐ日本語 中級』をお使いになって授業をなさる先生に、本書の考え方を深く理解していただくためのものです。授業の進め方の参考になさってください。

最終更新日:2024年5月1日

## 本書のねらい

社会で活躍する人材を育成するという目的のために、本書の学習を通して、

- ① CEFR/日本語教育の参照枠のB1レベルの日本語によるコミュニケーション力を身につけること
- ② 社会でよい人間関係を作って活動ができるようになるための社会人基礎力を養成すること
- ③ 社会活動に必要な情報収集、情報分析などの社会人技術力を養成すること

をねらいとしています。

## 本書の考え方

本書を作成するにあたっては、CEFRの考え方を参照しました。それは、CEFRの、「学習者を social agent と捉えて、活動をする中で学習を進めることにより、できる力を養成する」という考え方が、本書作成のねらいと合っていたからです。

### ① 課題を遂行する中で学習を進め、社会で活動する力を育てます。

CEFRでは、学習者を「社会で活動する人」とし、母語話者、非母語話者の区別なく、ともに活動しながら、学習を進めることを提唱しています。「わかってから活動する」のではなく、「活動する中で学ぶ」という考え方です。

本書では、この考え方を背景として、学習者は「自分がもっている力を総合的に使って活動する」ことを課題とします。語彙や文法を学習してから課題に取り組むのではなく、もっているすべての力を使って課題に取り組み、その中で学習を進めることとします。したがって、本書では各ユニットで使われる語彙や文型を取り出して学習することをしません。

しかし、発音の正確さ、語彙の適切さ、文法の正しさは、言語コミュニケーションの基盤であり、CEFRでは「言語能力」として位置づけられています。そこで、語彙や文法など言語知識を科目別に整理して理解することは言語知識の習得に効果があると考え、本書の学習時間とは別に語彙や文法、発音の学習時間を設けて、科目別に学習することとします。

### ② 5つの技能を統合して活動し、B1レベルの日本語力を育てます。

本書が目標とするB1レベルは、日本語教育の参照枠報告(文化審議会国語分科会 令和3年10月12日 p.22, 23)の日本語能力の「全体的な尺度」および、「活動 Can do」のB1レベルに以下のように示されています。

## 【全体的な尺度】〔自立した言語使用者 B1〕

仕事、学校、娯楽でふだん出合うような身近な話題について、共通語による話し方であれば、主要点を理解できる。その言葉が話されている地域を旅行しているときに起こりそうな、大抵の事態に対処することができる。身近で個人的にも関心のある話題について、単純な方法で結び付けられた、脈絡のあるテキストを作ることができる。経験、出来事、夢、希望、野心を説明し、意見や計画の理由、説明を短く述べることができる。

## 【活動 Can do】

## 聞く〔自立した言語使用者 B1〕

仕事、学校、娯楽でふだん出合うような身近な話題について、明瞭で共通語による話し方の会話なら要点を理解することができる。話し方が比較的ゆっくり、はっきりとしているなら、時事問題や、個人的若しくは仕事上の話題についても、ラジオやテレビ番組の要点を理解することができる。

## 読む〔自立した言語使用者 B1〕

非常によく使われる日常言語や、自分の 仕事関連の言葉で書かれたテキストなら理解できる。起こったこと、感情、希望が表現されている私信を理解できる。

## 話す(やり取り)〔自立した言語使用者 B1〕

当該言語圏の旅行中に最も起こりやすい大抵の状況に対処することができる。例えば、家族や趣味、仕事、旅行、最近の出来事など、日常生活に直接関係のあることや個人的な関心事について、準備なしで会話に入ることができる。

## 話す(発表)〔自立した言語使用者 B1〕

簡単な方法で語句をつないで、自分の経験 や出来事、夢や希望、野心を語ることができる。意見や計画に対する理由や説明を簡潔に示すことができる。物語を語ったり、本や映画のあらすじを話し、それに対する感想・考えを表現できる。

## 書く〔自立した言語使用者 B1〕

身近で個人的に関心のある話題について、つながりのあるテキストを書くことができる。私信で経験や印象を書くことができる。

授業では、各課の課題を遂行するにあって学習者は自分が持っている知識、技能を全て使って活動をし、それらすべての力を高めていきます。学習者によってその熟達度は異なりますが、B1 レベルを目標としています。実際には、それ以上の力を身に付ける学習者もいれば、それに及ばない学習者もいるでしょう。また一人の学習者のなかでも、技能によって持っているレベルが異なるでしょう。本書の課題は A2 以上の日本語力があれば、学習者それぞれのレベルで取り組むことができます。そして、学習者一人一人がその人なりの日本語力を身につけることがねらいです。

### ③ 「社会人基礎力」と「社会人技術力」を育てます。

コミュニケーションには言語だけでなく、言葉をどのように使うか、ほかの人とどのように関わっていくか、がとても重要です。本書では、社会の一員としてどのように考え、どのように行動するかを考えます。そして、課題遂行に向けて話し合いをしたり、意見交換をしたり、力を合わせて協同作業をすることで「社会人基礎力」を養成します。

「社会人技術力」は社会活動をする際に必要な ICT の活用および、情報収集、情報検索、文書作成、プレゼンテーション、統計などの技術力を言います。学習活動の中で、グループで調査、統計、レポート作成、プレゼンテーションなどを行い、実践を通して互いに働きかけ合ってスキルアップをしていきます。

### ④ 協働学習により、自立的、自律的、主体的に学習を進め、ディープ・アクティブラーニングを行う力を育てます。

「できる」とは自分の意思によって必要なときに必要なことができることを言います。ですから、「できる」力を養成するには、「する」必要があります。しかも、自分で考えて、自分で行動して、「できる」ことが重要です。そのため、本書では、学習活動が学習者自身の意思に基づいて行われること、学習者同士の働きかけによって学習を進めることとしています。

「自立的」は「自分で考えて行動すること」、「自律的」は「自分自身をコントロールすること」、「主体的」は「自分事と捉えて積極的に取り組むこと」という意味で使っています。

「ディープ・アクティブラーニング」は、「アクティブラーニング」松下（2015）\*によると「学生が他者と関わりながら対象社会を深く学び、自分のこれまでの知識や経験と結びつけると同時に、これからの人生につなげていけるような学習」という意味です。つまり、学習者が単に能動的主体的に学習を進めたとしても、そこに自分が生きていくための深い学びがなければいけない、ということだと言えます。

\*三重大学高等教育研究 別冊増刊号 高等教育創造開発センター主催 2015 年度全学 FD（2016/3/24）開催記録 p15

これらの考え方、および学習活動は、人が一人の社会人として、他者と力を合わせて生きていくときの在り方そのものだと考えています。つまり、クラスは一つの社会であり、授業で行われることはまさに社会活動です。これは CEFR でいうところの行動中心アプローチであり、社会活動をする中で学ぶ、ということです。

**⑤ 複言語・複文化のコミュニティで生きる「市民(シティズン)」としての意識を育てます。**

CEFR の代表的な考え方は複言語・複文化主義です。「複言語」「複文化」というのは、一つの社会に多くの言語や文化があるという「多言語」「多文化」とは異なり、一人の人が、程度の違いはあるけれども、複数の言語を理解したり使ったりし、それとともに複数の文化をもっていることです。

2018 年 12 月「外国人材の受入れ・共生のための総合施策」が出され、日本は外国人との共生社会をつくっていくことが国策になりました。そこで描かれる「共生社会」がどのようなものであるかを考えるとき、CEFR が参照され、CEFR の複言語・複文化の社会が想定されていると言えます。そして、外国人材も日本人もともにその社会の一員として存在する、というわけです。社会の一員としてのありかたを「市民(シティズン)」\*とここでは言います。そのために、市民としてコミュニケーションをし、ほかの市民とともに社会をつくっていく、という意識を育てようとしています。

**\*参考図書**

- ☆ 名嶋義直(2019)「民主的シティズンシップの育て方」ひつじ書房
- ☆ 名嶋義直(2022)「民主的シティズンシップ教育のローカライズを考える 「対話」を積み上げるための「異論」「複数性」「政治性」」『共生社会のためのことばの教育 自由・幸福・対話・市民性』p200-238、明石書店

**⑥ 文字情報をもとに活動する力を育てます。**

社会生活には文字によるコミュニケーションが重要な役割を果たすことから、社会人としての学習を始める中級の主要な課題の一つは「読む」と「書く」です。

各 Unit には第 1 課、第 2 課に課題文があります。課題文は学習者の読む力より少し難しいものを取り上げています。少し難しい文章をどのように読んでいくかを学ぶことが、読みの力を伸ばすことになります。また、その学びは、学習者同士で問いかけたり(外化)、自分の考えを振り返ったり(内化)、することで得られると考えています。

## 全体の構成

本書は、学習者が社会人として社会の入り口に立つことを支援していくことをねらいにしています。そのための準備として、Unit の内容を以下のように構成しました。

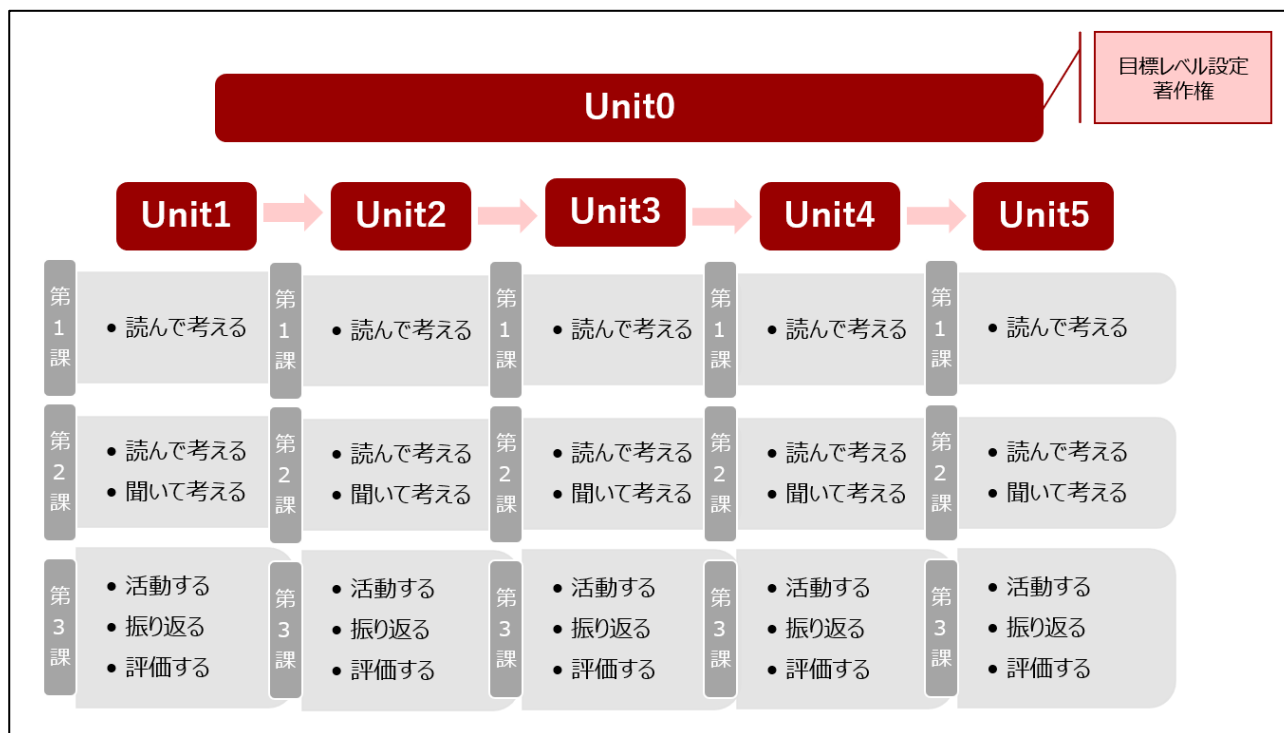
Unit	テーマ	目標
Unit0	このテキストで学ぶこと	1 自分の日本語の学習目標を設定する 2 社会で活動するためにどんな力が必要か知り、目標を設定する 3 学習活動に際して必要となる著作権に関する知識を学ぶ
Unit1	キャリアプランニング	自分の将来のキャリアについて考えて、自分の夢や希望を述べることができる
Unit2	文化	日本の文化や習慣の特徴を理解して、伝えることができる
Unit3	社会	1 「異文化理解」について考えることができる 2 地域の文化を理解し、その地域社会の一員である「市民」としての意識をもって、考えたり行動したりすることができる
Unit4	文芸	1 日本の文芸作品を読んだり聞いたりして、内容を理解し、感想を述べる ことができる 2 物語などを通して、自分の考えを伝えることができる
Unit5	生活	ライフスタイルについて説明したり意見を述べたりすることができる

## 各 Unit の構成

各 Unit は3つの課で構成されています。各 Unit の主課題は第3課の「活動」に取り組むことです。第1課、第2課は第3課の「活動」に取り組むのに必要な背景となる知識や考え方を文章を読んで、学びます。その際、同時に、その活動に必要な語彙や表現も学びます。また、第2課では、「活動」に関連した内容を聞く活動も行います。

第1課、第2課の課題文の読みの活動が終わったら、その文章を音読するトレーニングを行います。これは、課題文を声を出して読むトレーニングをすることで、課題文と同様の内容を聞き取る力、口頭で表現する力につなげることが目的です。

## 全体の構成



## 対象

CEFR および日本語教育の参照枠の A2 レベル以上の日本語力がある学習者

## 学習時間のめやす

- Unit0
  - 第1課・第2課・第3課 各90分（全3日間）
- Unit1～5
  - 第1課・第2課 約8～10時間
  - 第3課 約16～20時間
  - 1Unitあたり 約4週間

## 漢字の使用

- Unit0～2：総ルビ
- Unit3～5：初級（A2レベル）で十分習得されていると思われる漢字は、ルビなし

## 授業活動のねらいと学習の進め方

---

はじめに、Unit の扉を読んで、Unit の目標と内容を確認します。そして、第 1 課から第 3 課のタイトルを見て、どんなことを学ぶのか、軽く話し合います。Unit の内容がイメージで来たら、第 1 課に入ります。

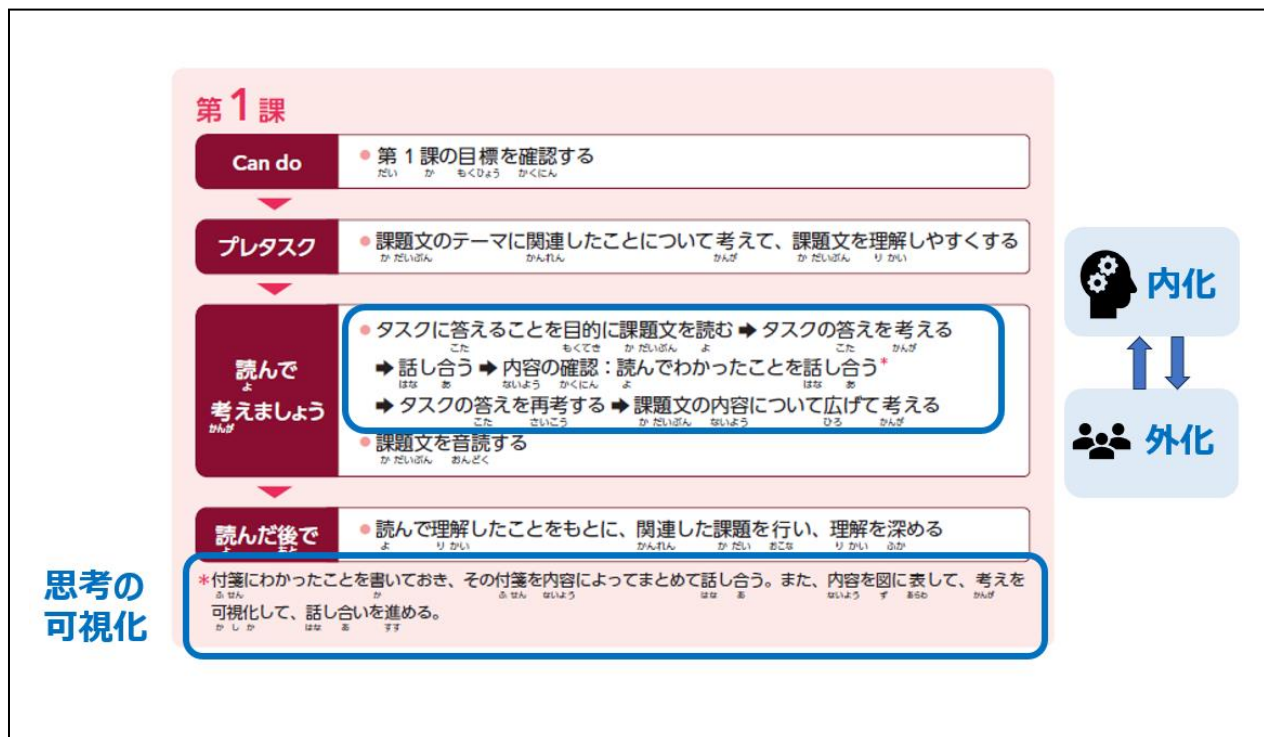
### 第 1 課の進め方

---

- 1 第 1 課のタイトルと学習目標の Can do を確認します。
- 2 プレタスクは、課題文を読むための前作業です。プレタスクは 1 つの場合も、2 つある場合もあります。課題文に関連した内容について、軽く、考えたり、話し合ったり、書いたり、読んだりします。
- 3 いよいよ課題文を読みます。課題文は学習者の日本語力より少し上のレベルの文章を取り上げています。これは実社会で自分にとって難しい文章に出会ったときに、どのように読み解いていくか、そのストラテジーを獲得することがねらいの一つだからです。  
まず、課題文がどのような文章かを確認します。  
その後、まず一人で読んでタスクの答えを考えます。  
できたら、学習者同士で答えを照らし合わせて、どうしてそう考えたかを話し合います。  
話し合いをもとに、再度一人で読みます。  
このように、一人で読む活動で自分の中に情報を取りこんで考える「内化」と、自分が考えたことをほかの人に伝えることで自分の考えを言語にして外に出す「外化」を繰り返して、理解を深めていきます。  
また、わかったことを付箋に書いたり、図に表したりすることで、考えを可視化し、自分にも、またほかの人にもわかりやすくします。それによって、互いの考えを共有しやすくして、話し合いをしやすくします。  
この読みの活動については、この後、詳しく書きます。
- 4 課題文を精読した後、改めてタスクを考えます。タスクの答えが変わるときもあれば、変わらないときもありますが、その理由を確認します。
- 5 課題文の読解をもとに、話題を広げて関連した事柄について考えてみます。（「広げて考えてみましょう」）
- 6 内容や表現など課題文が十分理解できた課題文の音読モデルの音声を聞いて、音読の練習をします。これは、課題文が実際の会話などでも使えるようにすることがねらいです。（音読の進め方 p.12 音読のポイント p.179 参照）
- 7 「読んだ後で」は読解の後作業です。課題文を読んで考えたことをもとに、考えたり、書いたり、話し合ったり、調べたりします。



## 第1課の構成



## 第2課の進め方

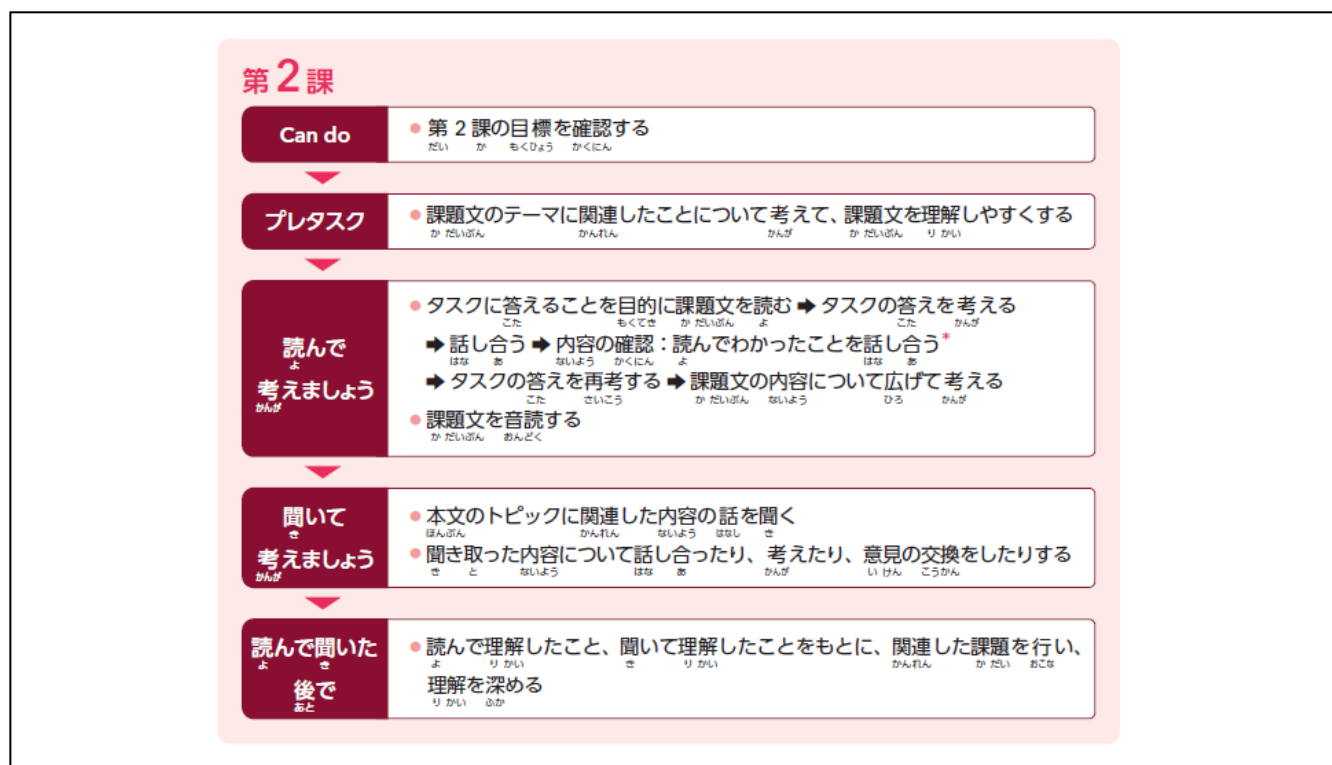
第2課も第1課と同様に、プレタスクをしてスキーマを活性化してから課題文を読みますが、第2課には読むだけではなく、課題文と関連した内容の話を聞く活動「聞いて考えましょう」があります。この聞き取りの課題は、学習者の聞く力より少し上のレベルの内容です。課題文の読みの活動と同様に、学習者同士が協働的に話し合って聞き取りを進めます。（ピア・リスニング）

なお、課題文の読みの活動の進め方は、第1課と同じです。

## ◆「聞く」活動の流れ

- 1 第2課のタイトルと学習目標の Can do を確認します。
- 2 プレタスクをします。
- 3 課題文がどのような文章かを確認したら、タスクを確認します。まず、一人で読んでタスクに答えた後、学習者同士で読んでわかったことについて話し合って、読み進めます。
- 4 課題文を精読した後、改めてタスクを再考します。
- 5 課題文の話題を広げて関連した事柄について考えてみます。
- 6 課題文の音読の練習をします。
- 7 課題文の内容に関連した話を聞きます。（「聞いて考えましょう」）
- 8 「聞いて読んだ後で」は読解の後作業です。課題文を読んで考えたこと、聞いて考えたことをもとに、考えたり、書いたり、話し合ったり、調べたりします。

## 第2課の構成



## 第3課の進め方

第3課は、Unit のゴールとなるメインの活動です。グループで活動を進めます。日本語力はもちろん、ほかの学習者との関わり方、活動をどのように進めていくか、どのように資料を整えるか、など、社会人として必要な力を養成することもねらいです。

「活動の前に」は第3課の活動の前作業、「活動」は本作業、「活動の後で」は後作業です。

## ◆第3課 授業の流れ

- 1 第3課のタイトルと Can do を確認します。
- 2 第3課の活動の内容を確認します。
- 3 第3課の活動を通して自分ができるようになりたいと思うことを考えて、自分の目標を設定します。(My Can do) 学習者同士で話し合いながら、決めていきます。
- 4 「活動の前に」に示されていることについて、考えたり、話し合ったりします。
- 5 「活動」の課題を確認して、どんなことをするのかを全体で話し合います。
- 6 グループ\*を決めます。(\*グループの作り方参照)
- 7 グループで「活動」の課題について、考えて話し合っ、何をするかを決めます。
- 8 具体的に活動の流れを考えて、スケジュールをたてます。
- 9 スケジュールをもとに、活動をします。課題について調べたり、考えたり、行動したり、話し合ったりします。

- 10 グループで話し合って、活動した結果をまとめます。
- 11 グループで、活動の成果を発表する準備をします。全体で、発表のポイントを話し合って確認をしたうえで、準備を進めます。
- 12 発表の準備ができれば、発表の練習をします。スライドの見せ方、立ち位置、話し方を考えて、練習します。
- 13 発表をします。各グループの発表を互いに聞いて、質問をしたり、感想を述べたり、意見を交換したりします。
- 14 発表について、発表のポイントをもとに、自己評価、相互評価をします。講師も評価をします。
- 15 「活動の後で」では、「活動」を行ったことをもとに、関連した事柄について考えたり、書いたり、調べたり、話し合ったりします。
- 16 最後に、第3課とUnit全体を振り返って、Can do チェックをします。

### 第3課の構成



## 「読む」活動

「読んで考えましょう」のねらいは、次の2つです。

- ① 課題に関連した文章を読んで、背景知識を得たり、関連する語彙や表現を知る。
- ② 自分の読む力より少し難しい文章を読むストラテジーを習得する。

そのために、教師の質問に答える形で学習を進めるのではなく、学習者同士が自分で読んでわかったことを伝え合ったり、互いに質問をし合ったりして、読みを深めていきます。この互いの働きかけによって、読んで理解したこと考えたことが言語化され、意識化されて、気づきが生まれます。自分の気づきが学習者一人一人の学びであると考えています。（ピア・リーディング\*）

\*参考図書

◇ 館岡洋子（2005）「ひとりて読むことからピア・リーディングへ：日本語学習者の読解過程と対話的協働学習」東海大学出版会

### ◆「読む」活動の流れ

読む活動の流れは次の通りです。

#### 1 タスクを確認する。

私たちは読みの活動をするときに、何らかの目的を持って読みます。そして、読んでわかったことをもとに、行動をします。読んでわからないところがあったら、調べたり、ほかの人に聞いたりするでしょう。このような実際の読みの活動と同様の活動を通して、読みの力を伸ばしていきます。

課題をもとに読む→読んでわかったことを伝え、わからなかったことを聞く→意見を交換する

#### 2 各学習者が、読んでわかったことを付箋に書く。書いた付箋を内容ごとにまとめる。

グループで、各学習者が書いた付箋を合わせて、内容をまとめる。

付箋に書くにあたって、学習者は文章のどこを書くか、どう書くかを考えます。この作業により読みとったことが可視化されます。可視化することで、ほかの人と考えを共有しやすくなります。また、自分で書いたものを見ることで自分が読み取ったことが意識化され、自分でも、またグループでも、考えを広げたり、深めたりしやすくなります。

#### 3 文章の内容を図式化する。

付箋のグループ分けを参考に文章の内容を図で表します。図にすることで、自分が文章全体をどのように理解しているかが可視化されます。自分の理解を確認したり、検討するのはもちろん、ほかの学習者とこの文章をどのように理解しているかを目で確かめながら検討できます。

## ◆「読む」活動の進め方

- 1 [全体で]タスクを確認する。
- 2 [一人で]タスクに答えることを目的に、文章を読む。
- 3 [一人で]タスクに答える。
- 4 [ピアで]タスクの答えについて話し合う。
- 5 [一人で]文章を読んで、わかったことを付箋に書く。
- 6 [一人で]付箋に書いたことを内容によってまとめる（グルーピング）。
- 7 [ピアで]付箋に書いたことを見せ合い、グループのまとめ方について話し合う。
- 8 [一人で]グルーピングした付箋をもとに、文章の内容を図に表す。
- 9 [ピアで]それぞれが書いた図を照らし合わせて、話し合っ、図を作成する。  
図が一つにまとまらなければ、二つでもよい。
- 10 [全体で]各組がかいた図を見せ合っ、説明をしたり、質問をしたりして、意見の交換をする。
- 11 [一人で]自分の図を見直して、再度図を作成する。
- 12 [一人で]タスクの答えを見直す。
- 13 [ピアで]互いのタスクの答えについて意見を交換する。

## 「聞く」活動

ここでは、聞く活動の授業の進め方を紹介します。聞く活動も読む活動と同様に、学習者同士の働きかけによって進めます。（ピア・リスニング）

- 1 どんな場面で聞くかを確認します。（例：p.54 就職のための面接を受けています。）
- 2 **聞く前に**、聞き取りの内容に関連した事柄について考えたり、話し合ったりします。
- 3 タスクを確認します。
- 3 **聞く**

[一人で]課題の話を聞いてタスクに答えます。メモをしながら聞くようにします。これは、実際の場面でメモをしながら聞くことができるようにするためのトレーニングです。聞く力が足りないときはメモをすることは簡単ではありませんが、聞き取れたことを文字化する練習として行っていきます。

- 4 [ピアで]聞いてわかったこと、タスクの答えを学習者同士で話し合います。
- 5 [全体で]どんなことが聞こえたか、簡単に確認します。
- 6 [一人で]もう一度メモを見て、書き加えながら聞きます。  
1 回目に聞き取れたことを確認したり、1 回目に聞き取れなかったところを聞くこと、また、ピアで話し合った内容や全体で共有した内容を確認することがねらいです。
- 7 [ピアで]2 回目に聞いたことをもとに、聞き取れたこと、タスクの答えを話し合います。
- 8 [全体で]2 回目を聞いて、聞き取れたこと、タスクの答え、ピアで話し合ったことを確認します。

学習者が十分聞き取れるまで、繰り返して聴いて、ピアで話し合い、全体で確認することを繰り返します。

- 9 **聞いた後で** [ピア・全体で] タスクの答えや話の内容がわかったら、聞いてわかったことについて話し合います。また、話の内容に関連したことを話し合います。
- 10 **聞いた後で+** 内容の聞き取りが十分できたら、最後に、スクリプト (p.182~187) を見ながら聞いて、内容や表現を確認します。

## 「書く」活動

中級レベルの課題の一つは、文字による情報発信です。文章を書いて、自分の考えや情報を伝えることができる、意見交換ができるようになることが目標です。

一般に「作文」という授業活動は教師に提出され、教師が読んで誤りを訂正したり、内容についてコメントしたりすることを想定しています。しかし、実際の社会では、教師に対して文章を書いて提出する、ということはありません。本書は、社会人として活動する力をもつことを目標としていますので、書く活動も実際の社会のどの場面でどのような目的で書くかを認識したうえで行う必要があると考えています。

また、書く活動も学習者同士の働きかけによって、学習者一人一人の気づきが生まれ、それが学びにつながると考えています。(ピア・レスポンス)

「書く」活動の進め方の例です。

- 1 何のために、だれに、何を書くかを確認します。  
書く課題だけではなく、読み手はだれか、どれぐらいの文字数を書くか、を確認します。
- 2 書く内容を考えます。  
学習者同士で話し合ったり、関連した資料を読んだりします。
- 3 書く内容がイメージで来たら、書く内容をメモしたり、構成を考えて図にしたりします。  
学習者同士で自分の案を見せて、話し合って意見を交換したり、提案をし合ったりします。
- 4 課題の文章を書きます。
- 5 書けたら、学習者同士で読み合って、感想を言ったり、内容についてよくわからないところを質問し合ったり、誤りを指摘し合ったり、書き方の提案をし合ったりします。
- 6 5をもとに、リライトします。
- 7 リライトできたら、再度、学習者同士で読み合って、意見交換をします。
- 8 必要であれば、さらに書き直したり、加筆修正をします。
- 9 完成した文章を教師に提出します。
- 10 教師は提出された文章を添削し、感想や意見を伝えます。
- 11 9の文章について、自己評価、相互評価、教師評価を行います。  
(「書く」の評価のポイントは、書く前に確認をし、それをもとに、それぞれの評価を行います。)



## 「グループ活動」の作り方とグループ活動の進め方

グループのメンバーを決めることは、学習者の学習成果に関わる重要なポイントです。

グループでの活動を通して、学習者にどのような学びがあるかを考えて、グループを決めます。学習者が何に関心があるか、学習者同士がどのような関わり方をするか、その結果、各学習者にどのような学びが起こるか、を考慮して決めます。

グループの人数も重要なポイントです。人数が少ない方が一人が話す時間が長くなりますが、話題の広がりはいくつ減ります。人数が多いと、自分が何をしたらいいのかわかりにくいので、グループでの役割を決めておく必要が生まれます。それらの要件を考えると、「読みの活動」「聞く活動」「書く活動」などの「ピア」での活動は2～3人のグループ、第3課のまとまった活動では4～5人程度のグループが、活動の目的に合っていて、学習者一人一人の活動が反映されやすいでしょう。

それらを考慮したうえで、学習者同士が決める、学習者が関心があるテーマを選ぶ、教師が決める、など、目的に合った方法でグループを決めます。

また、学習者にはグループで活動する「過程」が大きな学習課題であることを伝えることも大切です。作業を分担することは決して悪いことではありませんが、それぞれが行ったことをどのように検証し合って、どうまとめていくか、その話し合いこそが「できる」力として求められていることを伝えましょう。単に作業を分担して、それぞれが発表して終わり、という学習ならグループでする必要はありません。とにかく成果物の良し悪しが評価の対象になりがちですし、学習者がそのように理解して行動する可能性は十分あります。本来の学習成果を得るためには、学習者が学習課題をしっかりと認識していることがとても重要です。

### ◆作業の流れと人数

① 1人作業⇒ペア作業⇒グループ作業（3、4人／3～5人）⇒ペア作業⇒1人作業

例【「読んだ後で」の「書く」活動】

1人でメモを作成し、作文を書く。

⇒隣の人とペアになり、作文を交換して読み合い、修正したほうがいい箇所を指摘し合う。修正もする。

⇒グループになり、作文を読み合う。質問をしたり感想を言い合い、評価もする。

⇒ペアに戻り、受けた評価内容をもとに更に修正が必要な箇所について話し合う。

⇒話し合った内容をもとに1人でリライトする。

② 1人作業⇒ペア作業⇒グループ作業⇒クラス全体で共有・意見交換⇒ペア作業⇒1人作業

例【「読んで考えましょう」の「本文の確認をしましょう」の活動】

1人で本文を読みながら、わかったことを付箋に書く。

⇒隣の人とペアになり、付箋を見せ合って本文の内容を整理する。

⇒ペアとペアを合わせたグループになり、整理したふせんを見比べながら本文の内容を図で表す。

⇒クラス全体で各グループの図を共有する。他のグループの図を見て、自分のグループの図を振り返る。

⇒ペアに戻り、ふせんに書いた内容を再度確認し、ふせんに書いたこと以外のわかったことについても確認する。

⇒1人でもう一度本文を読む。

### ◆活動の目的と人数

- ・考えたことや思ったことをまず言語化する、相手の言うことを聞いて考える：2人
  - ・いろいろな意見を聞く：3～5人
- ※人数が多くなると一人の発話の時間が少なくなり、意見交換が十分行われなくなる。
- ・話し合っ出てきたものを伝え合う、話し合いを完成させる意識、他のグループの話し合いの内容を知る、より広く意見交換をする：クラス全体

### 「発表」のねらいと進め方

---

本書では学習のいろいろな場面で「発表」をします。

グループ内で自分の考えを伝える「発表」や、グループで準備をしてクラス全体に伝える「発表」があります。

前者は、グループ活動の中で、説明をする際の話し方で、準備をしないで行います。

後者は、話す内容や話し方をしっかり練習して、スライドなどの視覚資料も用意して行うものです。後者の発表は、発表後にFBを行い、自己評価、相互評価、教師評価をします。

### 「評価」の仕方

---

本書の活動は、学習者がもっている力を全て駆使して行います。評価は、活動の様子を観察すること（パフォーマンス評価）により、また活動課程での種々の成果物を見ることにより行います。成果物は、単に最後の発表やレポートだけではなく、企画、実施内容などの記録を残しておき、まとめて評価します（ポートフォリオ評価）。

### 評価のポイント

- ① 目標がどの程度達成されたか
- ② 「CEFR」および「日本語教育の参照枠」の5技能の熟達度

### 「読む」の評価

主に「読んで考えましょう」の活動を観察して、評価します。ピア・リーディングの話し合いの様子を観察したり、付箋を使ったり図式化をしたりして可視化された学習者の理解の状況を見たりして、学習者の読みを評価します。



## 「聞く」の評価

主に「聞いて考えましょう」の活動を観察して、評価します。音源を聞いた後、学習者同士が聞いてわかったことを話し合う様子を観察します。その際、聞いてわかったことをミニホワイトボードに書かせたり、選択式のクイズを出してその答えをもとに話させたりして、聞き取ったことを可視化できるようにします。

## 「書く」の評価

「書く」の評価のポイントは、次の5つです。

- ① 課題の要件（だれに、何を、どれぐらいの文字数で書くか）を満たしているかどうか
- ② 課題について、言いたいこと、伝えたいことが読んでわかるかどうか
- ③ 構成がはっきりしていて、読みやすいかどうか。
- ④ 課題について言いたいこと伝えたいことが内容豊かに書かれているかどうか
- ⑤ 表記や表現が適切で、読みやすいかどうか。

①～⑤について、ルーブリックを作成して評価すると評価に一貫性、透明性が得られます。

### 参考図書

- ◇ 田中真理／阿部新（2014）「Good Writing へのパスポート 読み手と構成を意識した日本語ライティング」くろしお出版
- ◇ ダネル・スティーブンス+アントニア・レビ（2014）「大学教員のためのルーブリック評価入門」玉川大学出版部

## 「発表」の評価

内容と話し方を評価します。

内容の評価のポイントは、発表の内容がわかるかどうかです。わかる場合は、その内容が豊かかどうか、わかりやすいかどうか、を評価します。

話し方の評価のポイントは、声の聴きやすさだけではなく、話すときの立ち位置、表情、資料の提示の仕方、態度など、非言語要素です。

## 「話す(やりとり)」の評価

これは、学習者がグループワークをしているときや、活動をしているときの様子を観察したり、発表時の質疑応答の様子を観察したりして、評価します。

評価のポイントは、どのような話題について、どのように質問をしたり説明をしたりするか、を観察して、評価します。相手の意見をどのように受け止めて理解しようとするかも評価します。

## Unit0

最終更新日:2024年5月1日

### Unit0のねらい

- ① 本書で学習を始めるにあたり、どのような日本語力を身に付けるか、目標とする日本語のレベルを確認する。また、そのためにはどのような学習をする必要があるかを理解する。
- ② 本書の活動をする際に必要となる「著作権」について理解する。

### Unit0 の概要

中級の日本語学習とは、社会人としてのスタートラインに立つための学習だと捉えています。そのためには、漠然と学習を始めるのではなく、まず、自分の今後を考え、そこで何が必要なのか考えて、自分自身の日本語学習のゴールを描くことから始めることにしました。しっかりゴールを見据えて学習に取り組むことで、単に目の前の日本語教材を学ぶのではなく、社会で活動する人としての考え方、知識、コミュニケーションのための日本語を学ぶことができ、社会人としての成長が期待できるでしょう。

本書では、日本語力とは日本語によるコミュニケーション力を言います。したがって、日本語力を表すにあたっては、日本語で何ができるかが基準になります。自分の学習目標を設定する際に、「できる」ことが指標になります。そのために本書が基盤としている CEFR の考え方を理解すること、さらに、CEFR をもとに作られた「日本語教育の参照枠」が日本語教育の参照すべきものとして提示されていることを知っていることが重要です。

Unit0	課	タイトル	学習時間めやす
	第1課	どのようなことができるようになるか	90分
	第2課	社会で活動するために—社会人基礎力・社会人技術力—	90分
	第3課	知っていますか?「著作権」	90分

### 進め方

A2レベルの学習者には難しい語彙や専門用語が多く出てきます。CEFR、日本語教育の参照枠など、日本語で理解するのは困難な事柄については、母語で調べてください。また、内容の理解も、調べたことを学習者同士で話し合うことで深めていきます。教師は学習者の質問に答えたり、何を調べたらいいかや考えるきっかけになるような声掛けをしたりします。

**第1課 どのようなことができるようになるか**

この課ですること：

- 1 これからの自分に必要な日本語はどのようなものかを考える。
- 2 目標にする日本語のレベルを考える。

**1 今の私の日本語レベル**

今の自分の日本語力がどれくらいかを振り返って考えてみます。「日本語力」とはどんな力を言うのかを考えることが課題です。

本書は、「初級」を終えた学習者が「中級」に進んで学習をする際に使うことを想定しています。そこで、「中級」とはどんなレベルなのかについても考えてもらいます。

**2 私に必要なのはどんな日本語？**

次に、将来必要となる日本語力、自分が到達目標とする日本語力を知るために、「未来年表」を作ります。例として、日本語学校で勉強している学習者の未来年表を示しました。

ここでは、一般的に日本語力を表すのに使われている JLPT ではなく、「～できる」という能力記述文で日本語力を示している CEFR を出しています。

**3 知っていますか？「CEFR」**

本書が考え方の基盤としている「CEFR」を知るために、母語で「CEFR」について調べて、わかったことを伝えます。

その後、日本語力を示す6レベルについて確認するために、5 技能のうちの「話す」の「やりとり」と「発表」の能力記述文を調べて、レベルを確認します。

**4 「日本語教育の参照枠」**

CEFR をもとに作成された「日本語教育の参照枠」について調べて、わかったことを話し合います。

レベルは6つあり、言語活動は受容と産出と仲介の3つのモードがあります。受容の技能は「聞く」「読む」、産出は「話す（発表）」「書く」、仲介は「話す（やりとり）」です。

\*文化庁「日本語教育の参照枠 報告」 文化審議会国語分科会 令和3年10月12日

[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/93476801\\_01.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/93476801_01.pdf)

続いて、5, 6 を考え、発表し合って、考えを深めます。

**5 今の私ができること・将来できるようになりたいこと****6 この教科書を終了するまでの目標**

**第2課 社会で活動するためにー社会人基礎力・社会人技術力ー**

この課ですること：

- 1 社会で活動するために必要なことは何かを考える。
- 2 社会人基礎力とは何かを考える。
- 3 社会人技術力とは何かを考える。

社会で活動するには単に言葉が使えるだけでは不十分であることをしっかり理解することが課題です。

本書では、協働学習を主体に学習を進めますが、そこでは互いを尊重し、受け入れたうえで、前向きに取り組むこと、意見交換をすることが求められます。それは、正に社会人として活動するうえで必要不可欠な事です。さらに、各 Unit の 3 課では、課題を遂行するためにほかの学習者と協同することになります。ここでも、グループの一員としてどうあるべきかを考え、行動することは、将来の社会で活動するときの力になります。その点で、本書では、教室活動は社会活動そのものだと捉えています。

また経産省の提唱する「社会人基礎力」を知ることで、人との関わり方、社会でのあり方を分析的に捉え、自己を振り返り、新たな一步を踏み出せるようにします。

- 1 社会人に求められる力とは
- 2 「社会人基礎力とは
- 3 これも必要！「社会人技術力」

**第3課 知っていますか？「著作権」**

この課ですること：

- 1 著作物には著作権があり、著作物を利用するときは著作者の許可が必要なことを理解する。
- 2 私たちが新しく作ったものにも著作権があることを理解する。

本書の活動を行う際には、調べたことをもとに発表をする機会が多くあります。その際に、映像や文章などを引用したり、参考にしたりすることになります。また、自分が作成することもあるでしょう。これら著作物の扱いについて学びます。これは、将来社会で活動するときにも必要になります。概念としてだけでなく、実際に適切に行動できるように、具体的なケースをとりあげて「質問」としました。

## 1 著作権のしくみ

【参考】著作権に関する教材（文化庁）

<https://www.bunka.go.jp/seisaku/chosakuken/seidokaisetsu/index.html>

キーワード「著作者」「著作物」「著作権」「著作権法」とそのしくみを学んだら、「質問」について考えてみます。ここでは、学習者がそれぞれ考えたことを伝え合って、調べたり、考えたりします。その活動の中で、著作権について意識を深めるのがねらいです。正解は出なくてよいし、ここでは解答例を示しません。続いて、2，3について少し詳しく学んだあとで、改めて「質問」について考え直すこととします。

## 2 「著作物」とは

「著作物」にはどのようなものがあるか、学びます。

## 3 「著作権」とは

①「著作権」について理解を深めます。わからないことがあれば、調べて、話し合います。

②「質問」についてもう一度考えます。

「質問」についてもう一度話し合って、解答を考え直します。その後で、解答例を示します。自分たちの解答と解答例を照らし合わせて話し合います。

質問の解答例（所属機関によって、著作物利用に関する対応が異なる場合があります。）

### a. 許諾を取る必要はない

敷地外からの撮影は景色に含まれるものになるので、自分で撮影したものであれば、アップロードする際に、お寺に許諾を得る必要はない。

### b. 許諾を取る必要はない

休み時間に個人の楽しみとして歌うのであり、営利目的で歌うわけではないので、許諾を取る必要はない。

しかし、授業中に歌う場合は、その行為が授業活動と見做され、授業が授業料をとって行っているため、許諾が必要になる。

### c. 許諾を取る必要がある

動画は著作物であり、著作者がいる。個人で見る場合は許諾は必要ないが、授業活動に利用することは営利行為につながる行為であるので、許諾が必要である。

## d. 許諾を取る必要がある

絵や写真にはそれぞれ絵を描いた人、写真を撮った人がいる。その人（著作者）の作品（著作物）を利用するには当然、許諾が必要である。また、著作者が作った著作物を著作者に無断で手を加えること（「改変」）は、程度の大小にかかわらず許されていない。したがって、改変して使用したい場合は、改変したものを提示して、許諾を得なければならない。

## e. 許諾を取る必要がある

クラスメイトが撮った写真は著作物であり、クラスメイトは著作者である。他人の著作物を勝手に公表することはできない。したがって、著作者に許諾を得る必要がある。

## f. 許諾を取る必要はないが、必ず出典を示さなければならない

インターネットに出ているものは、ほかの書籍と同様、著作者が公開している著作物である。それをレポートや論文など、営利目的でないものに引用する場合は、著作者に著作物の引用の許諾をとる必要はないが、出典は必ず示さなければならない。なお、引用する際は、文言はもちろん、表記もそのまま引用し、変えてはいけない。

## g. ほかの人は「あなた」に許諾を求めなければならない

ほかの人は、「あなた」から利用許諾が得られてからでなければ、スライドを利用することはできない。「あなた」が発表用に作成したスライドは著作物であり、作成した「あなた」は著作者である。したがって、ほかの人がそれを利用する場合は、ほかの人は著作者である「あなた」からあなたが作成したスライドを利用の許諾を得なくてはならない。

③今後自分たちが調べたことなどを授業内で利用するにあたり、「利用許諾」を取る必要があるかどうか、著作権を侵害していないかどうかをチェックするためのシートを作成します。できたら、互いに紹介し合って、必要であれば加筆修正をして、自分たちが実際に使用するものにします。

## 4 コピーライトマーク

自分が作ったものについても著作権があり、それを示すことを学びます。

## 各課のポイント

## 第1課 どのようなことができるようになるか

## 進め方のポイント・アイデア

## ● 机といすの配置

この課に限ったことではありませんが、このテキストでは、何かを考えたり調べたりするたびに「クラスメイトと話しましょう。」があり、ペアやグループで話すことになります。机といすは学習者同士が話しやすいように配置しましょう。それだけではなく、中級に入ったばかりのこのレベルでは、教師が学習者に「これから何をするのか」、活動の指示をしっかりと伝えることが大切です。教師やホワイトボード、モニターにも全員が注目できて、なおかつ学習者同士が話しやすい配置を考えてください。

机といすの配置は、教室活動に合わせて、適宜変えていきましょう。

## ● することの確認

Unit 0には各課に「この課ですること」が書いてあります（Unit 1以降は「Can do」が書いてあります）。学習者が目的意識をもって授業時間を過ごせるように、しっかり理解してもらいましょう。学習者に声に出して読んでもらい、ということなのか問いかけながら確認をします。

## ● 学習者に合わせて進める

「1 今の私の日本語レベル」では、初級レベルの学習を終えた自分が日本語でできることを整理して、そのうえで「中級」レベルがどのようなものなのかイメージをしてみます。今できることと「中級」レベルのイメージを一気に一人で考えて、それをグループやクラス全体で共有するということができる場合もあれば、「今、できることは何ですか」という質問にどう答えればいいのかよくわからない学習者がいる場合もあるかもしれません。そのような時は手取り足取り、一緒に考えていきましょう。例えば、初級レベルでどのようなことを学習してできるようになったか、「あいさつ」「買い物」「電車やバスの乗り方を聞く」「外食での注文」などの例を出して思い出してもらおうと、学習者は隣の人やグループの人とあれもこれもと話し始めます。それが落ち着いたところで、次は「中級」レベルでは日本語でどんなことができるのかを考えてもらいます。教師は学習者が活動しやすいように、指示を出したり声をかけていきましょう。

テキストに「クラスメイトと話しましょう」という指示文がありますが、これはペアで話したり、グループで話したり、クラス全体で共有したりすることを想定しています。クラスの規模やかけられる時間等を考慮して授業の流れを考えてください。

学習者が考えたことはミニホワイトボード等を使って見えるようにしておくのがお勧めです。学習者同士が話す際に内容が伝えやすくなり、全体共有がしやすくなります。教師も学習者の考えや活動内容を見ることができるので、学習者の理解や進行状況を把握することができます。

- 未来年表を作成する目的

「つなぐにほんご 初級」を使用して初級の学習をした学習者は第 28 課のアクティビティーで一度キャリアアップランニングをしています。そのときよりも具体的に、必要な日本語力や学ばなければならないことなどを考えます。これはこの後の「CEFR」や「日本語教育の参照枠」が提示している日本語のレベルについて知り、自分に必要なのはどのレベルなのかを考えるための作業です。もし「つなぐにほんご 初級」の第 28 課のアクティビティーで作成した絵や図などがあれば、そこに具体的な内容を書き加えていくという方法もできます。

さらにこの後、Unit 1 の第 3 課で改めてキャリアアップランニングをする機会がありますが、その目的は将来したいことを掘り下げ具体的に考えることです。この Unit 0 第 1 課は自分に必要な日本語のレベルと、そのレベルでできることを知ることがポイントです。

## ここに注意

- 「CEFR」「日本語教育の参照枠」について学習者が調べ、わかったことを出し合う活動があります。初級終了レベルの学習者なので難しい内容を日本語で出してくるということはあまりないかもしれませんが、その出てきた内容が間違っていないかを判断できるよう、教師も「CEFR」と「日本語教育の参照枠」についてある程度知っておくことが必要です。学習者が目標とする日本語のレベルをしっかりと捉えられるようサポートしましょう。

## 第2課 社会で活動するために—社会人基礎力・社会人技術力—

### 進め方のポイント・アイデア

- テーマの提示

第 2 課では社会で活動していくのに必要なことについて考えますが、学習者は、急に「社会で活動するために必要なことは何でしょうか。社会人基礎力と社会人技術力ですね。」と言われても何のことかさっぱりわからないでしょう。まずは「社会で活動する」とはどういうことなのかを考えるとところから始めてはいかがでしょうか。

第 1 課で自分が将来日本語でできるようになりたいことについて考えました。その際に学習者は、将来「したいこと」をするためにこれができるようになりたい、と考えたはず。 「したいこと」は、仕事、勉強や研究、趣味の活動などさまざまだと思いますが、この第 2 課では、そのしたいことをしている自分を具体的にイメージしてもらい、周りにはどんな人がいるのか、その人たちとどうコミュニケーションをとるのか、日本語が使えればほかに何も問題がないのかなどを考えることで「社会人に求められる力」や「社会人基礎力」「社会人技術力」に触れる動機付けができます。



- 「社会人基礎力」「社会人技術力」

「社会人基礎力」がどのような力なのかはテキストに書いてありますが、学習者には具体的にどのようなことができる力のことなのかを考えてほしいです。例えばクラスの学習者を進路希望別のグループに分けて、職場で、大学や専門学校で、大学院の研究室で、どのようなときにどのようなことができる力なのか、話し合う時間を持ちましょう。そして、今いる日本語学校などの教室も「社会」であり、授業活動が社会活動であること、このテキストを使用した授業活動を通して「社会人基礎力」を養成していくことも学習者にぜひ伝えてください。

「社会人技術力」は具体的なスキルなので、学習者も理解しやすいと思います。自分が今できることは何か、まだできない、自信がない、したことがないことは何か、自己チェックをしてもらいましょう。教師からは今後 Unit 1～5 の学習を通して「社会人技術力」も養成していくことを伝えてください。

- 「自分の課題」の言語化

今後どのようなことを意識して学習を進めていくかを考えただけで終わりにせず、書いたり話したりして言語化することで、学生の「意識」につなげます。「社会人基礎力」と「社会人技術力」の Can-do 記録表もついているので、ひとつの Unit が終わったら自己評価をしましょう。その際にここで決めた「自分の課題」についても振り返っていくとよいと思います。そのためにも「自分の課題」がいつでも見られるように残してあると便利です。

### 第3課 知っていますか？「著作権」

#### 進め方のポイント・アイデア

- 「著作権」について知っていることの共有からスタート

テキストの「1 著作権のしくみ」を読む前に、第3課のテーマやすることを確認していく中で、学習者がその時点で知っている「著作権」に関する情報をシェアしてみます。日本のアニメやマンガが好きだという学習者が多いので、教師側が想像する以上に「著作権」についてすでに知っていることが多いかもしれません。知っていることをたくさん共有できた場合でも、それが正しい情報なのか、この課の学習を通して確かめていきましょう。

- 「質問」には2度答える

テキストに a～g の7つの質問が用意されています。「1 著作権のしくみ」を知った後でまず答えを考えてみます。なぜそう思うのかも含め答えをクラスで共有しますが、この時点では答えがはっきり出ないものもあるかもしれません。それでいいです。この時点での答えを残しておいて、「2 『著作物』とは」と「3 『著作権』とは」の学習を終えた後で再度質問の答えを考えます。1回目と答えを変えない場合も、答えを変える場合も、理由を確認しましょう。

例えばgの質問では、「ほんとうは許可をとるべきだが、私はほかの人が使ってもかまわない」という学習者がいたり、「友達が使うのは別にいいけれど、知らない人が勝手に使うのはいやだ」という学習者がいたりしました。自分が著作権者としてもつ権利についてや、著作権者としてどう感じるかなどについても話し合うことで、利用者としてはどうするかを考える糸口になります。

- 著作権チェックシートを実際に使用する

この課を学習した後でプレゼンテーション等をする機会があるのであれば（このテキストでは UnitI の第3課が次の機会です）、その資料作成中に実際にチェックシートを使用してみます。一度だけでなく資料やレポートなどを作成する度に繰り返し使用していくことで、将来的にはチェックシートがなくても気を付けられるようになることが期待できます。

### ここに注意

- 所属機関によって、著作物利用のための許諾申請が必要かどうか異なる場合があります。ご自身の所属機関ではどうなのか、理解しておきましょう。

# Unit1

最終更新日:2024年5月1日

## Unit1 のねらい

自分の将来のキャリアについて考えて、自分の夢や希望を述べることができる。

## Unit1 の概要

学習者が社会で活動をする力をつけるには、学習者一人一人が自分の将来をイメージして学習を進めることが重要です。Unit1では、自分の将来を考えて、イメージを持ったうえで、今自分がすべきことは何か、今日日本語の学習をどう進めるか、目標をどう設定するかを考えます。

第1課では、自分の将来を考えるために、まず自分を振り返って、自分の強みは何かを考えます。

第2課では、自分の将来を考えて、進学や就職をする先を調べたり探したりするトレーニングをします。そして、進学や就職の面接で自己PRをする場面をイメージして、自分をどう紹介するかを考えてやってみます。

第3課は、「働く自分」をより具体的にイメージするために、日本の業界がどのようなものかを理解する活動を行います。そして、日本の業界を知ったうえで、「自分の将来」を考え、キャリアプランニングをします。できるだけ具体的にイメージするように、キャリアを図で表すことを課題にしました。

また、第1課では、自分の特色を伝えられる自己紹介をするのに必要な語彙や表現を学びます。第2課では、学校案内、企業案内のパンフレットやホームページを読むトレーニングをします。第3課では、企業の情報を取るトレーニング、就職に必要な情報のポイントを知るトレーニングをします。

さらに、第3課では、調べたことをクラス全体に伝えるために、スライドを使ってプレゼンテーションを行います。スライドの作り方、プレゼンテーションの仕方、発表するときの話し方などを学びます。

最後に、Unit1を振り返って、自己評価、相互評価をします。教師は、教師評価をします。

## 進め方

### 第1課 自己分析

#### Can do

- 1 自分がどんな人か分析して、わかりやすくアピールすることができる。
- 2 自己紹介のスピーチを聞いて、理解することができる。

自分の将来を考えるために、今の自分を振り返って、自分がどんなことが得意か、何をしたいと思っているのか、どんなことに向いているのかを考えてみます。

まず、「プレタスク」で自己紹介をします。自分を紹介するとき、どんなことをどのように言えばいいのか、今の力でやってみます。また、自分を紹介するときの言葉や表現、紹介のポイントを知るために、インターネットで「仕事選び」や「適性診断」をやってみます。

「読んで考えましょう」では、長めの文章（約1,000字）に挑戦します。就職活動をする人に向けて書かれた文章を読んで、筆者の伝えたいことを読み取ります。初級を終えた学習者にとって未習の語句や漢字がある文章に挑戦することは、内容の読み取りと同時に大切な課題です。実際の場面での読みの力をつけるために、読んでわかったことを学習者同士が伝え合い、また、わからないところについて話し合って読み進めます。これを「ピア・リーディング」と言います。教師と一緒に読んで、教師の問いに答えるという読み方はしません。

## 第2課 自己PR

### Can do

- 1 学校案内や会社案内を読んで、必要な情報を得ることができる。
- 2 簡単な自己PRをして、自分がしたいことを伝えることができる。

第2課では、自分の強みを考え、それをアピールするための文章を書きます。将来、就職の際に求められる自己PRや面接につながることを想定しています。

自分の特徴は自分ではわかりにくいものです。そこで、「プレタスク」では、自分の特徴を考えて、自己PRをしてみます。そして、聞き手になった人が話し手の自己PRのポイントの中から魅力的だと思うことを見つけて、話し手に伝えます。

そのうえで、専門学校、会社のホームページを読んでみます。学校や会社の特徴を読んで理解できるようになるための読みのトレーニングをします。さらに、読んでわかったことをもとに、学校や会社を選ぶときに必要なことは何かを知り、学校や会社がどのような学生や人材を求めているかを理解する練習をします。

「聞いて考えましょう」では、実際の面接の様子を聞いて、どんなことをどのように話すといいかを考えます。特に、自分のアピールポイントをどのように伝えるかを考えます。

最後に、「読んで聞いた後で」では、自分の強みを考えて、書いて、話してみます。書くことによって文字化され、言語化されて、より明確に意識することができます。また、ただ書くだけではなく、それを具体的に伝えるために自分の経験や体験を取り上げて、話す練習もします。

面接時の話し方のポイントとして、最初に伝えたいポイントを言ってからそれを説明する話し方ができるようになるために、話すことを書いてから話してみます。（p.56～58）

さらに、実際に面接をしてみます。面接でどんな話し方をすればいいか、体験して実際にどれくらいできるのか、できないことは何かがわかります。また、面接官の役を演じることで、面接で求められること、話の内容、話し方、態度などがはっきりわかります。（p.59）

### 第3課 キャリアプランニング

#### Can do

- 1 会社のホームページを見て、どんな会社が把握することができる。
- 2 得た情報をもとに、発表用のスライドを使って、その会社をほかの人にわかりやすく伝えることができる。
- 3 「自分がやりたい仕事」など将来の希望について話したり書いたりすることができる。

自分のキャリアプランを作ることが第3課の課題です。自分のキャリアを考えるために、まず日本の業界を知ることから始めます。「活動の前に1」では、「業界」とはどのようなものかを知ることが課題です。「活動の前に2」では、企業情報を知るために必要な「語句」を確認します。

「活動」には「活動1」と「活動2」があります。「活動1」では、グループで自分たちが関心のある企業を選んで、紹介をします。会社の基本情報や採用情報を調べて、企業の実像を具体的にとらえることを試みます。また、調べたことをわかりやすく伝えるために、発表用のスライドを使ってプレゼンテーションをすることに挑戦します。どんなことをどのように示せばいいのか、スライドはどのように作ればいいのか、どんな話し方でプレゼンテーションをすればいいのかを学びます。まず、話す内容を決めたら、発表用のスライドを作ります。スライドごとに話すことを書きます。実際にスライドを動かしながら、話す練習をします。立ち位置、体の向き、声の大きさ、表情などにも注意します。グループの全員が発表のトレーニングができるように、発表するところを分担します。

発表は、一つのグループごとに発表が終わったら、感想や質問、意見の交換をします。発表時には、発表者だけでなく、聞き手の態度や質問の仕方なども注意して、どのような聞き方がいいのか、質問の仕方、感想や意見の述べ方も「話し方」として練習をしたうえで発表を聞き、終わったらフィードバックします。よい聞き手になれることは、社会人として活動するときの重要なポイントであることを伝えます。

最後に「発表」の評価をします。

「活動2」では、自分の将来について考えて、今の考えを図に書いてみます。そして、そのキャリアのために今しなければならないことは何かを考えます。自分で考えて書いたものを、グループの仲間に紹介して説明します。互いに質問をし合ったり、感想や意見を交換するなかで、多くの気づきを得ることができると期待されます。グループの人とのやりとりが終わったら、もう一度自分で考えます。必要であれば、キャリアの図を書き替えます。

そして、「活動の後で」では、「活動2」で考えたキャリアプランについて書きます。だれに向けてどんなことを書くかは、学習者自身が決めます。書き終わったら、互いに読み合って、感想と評価を書きます。その後で、自分が書いたキャリアプランについて自己評価をします。

最後に、第3課の活動と Unit1 全体を振り返って、目標の Can do がどれくらいできるようになったかチェックをします。

## 各課のポイント

### 第1課 自己分析

#### 進め方のポイント・アイデア

- 自己紹介を2回する理由

第1課では自己紹介を2回実施します。1回目は「プレタスク1」の活動として、2回目は「読んだ後で」の活動として設定しています。「プレタスク1」ではSNSやチャットルームを使用して今できる日本語で自己紹介をして、「読んだ後で」では自己紹介の内容をスピーチすることが課題です。1回目の自己紹介と2回目の自己紹介の間には自分について考える活動が準備されているので、2回目の自己紹介の準備をする頃にはより自分について語れることが増えているはずです。また、「スピーチ」なので、人前で正式にする自己紹介に進化させることを意識してください。

- 中級レベルの文章にびっくり！？

Unit1 第1課の「読んで考えましょう」が、このテキストで学ぶ学習者にとって初めての「読む」活動です。文字がたくさん並んだ文章を見て、面食らってしまう学習者もいるかもしれません。初級を終えたばかりの学習者が読む文章ということで、文章全体を前半と後半に分けて提出しています。既にたくさん読める学習者であれば一気に読んでも構いませんが、まず前半を読んでタスクの答えを考えて、一度クラスで共有し、後半を読んでまたタスクの答えを考えて、再度クラスで共有し、とはじめはゆっくり丁寧に進めてください。（本資料 p.13 「授業のねらいと進め方」「『読む』活動の進め方」もあわせてご覧ください。）

このタスクのポイントは「この文章を書いた人は」です。文章を読んでいる私（自分）からのアドバイスではなく、筆者の立場になって考えることをしてほしいのですが、学習者にとってこれは簡単なことではありません。学習者がしっかりタスクを理解したことを確認してから読む作業に入ります。

「本文の確認をしましょう」の3番、「確認しましょう」には本文の内容理解を問う問題があります。この問題ひとつひとつについて、クラスで答え合わせをして、どこからどう読み取ったのかを確認して、という活動を想定しています。ですが、1番の付箋を使っている活動や2番の図で表す活動をする中で3番の問題の答えや読み取りがクラス全体で確認できてしまう場合もあります。そのような場合には改めて3番を扱う必要はありません。

「タスクをもう一度考えましょう」は、よく内容理解ができた後で、タスクの答えを考え直す活動です。答えを変えないという学習者にも、変えるという学習者にも、その理由を問いかけてください。理由を確認することで、学習者の理解度を知ることができるはずです。

- 「音読」の時間を積極的にとりましょう！

本文を読んだ後に「音読」の活動を入れています。内容をよく理解した文章を声に出して読む活動です。この音読は、このレベルの学習者がこのレベルの言葉や表現を使って話せるようになるための大切なトレーニングの一つです。進め方はp.179を参考に、学習者に合わせて、読む文章の量を調整したり、練習のポイントを絞ったりしてください。第2課以降も繰り返し「音読」の活動が出てくるので、本文の内容によって読み方を変えたり、練習のポイントを変えたりして継続して取り組んでいきましょう。

- 「長所」や「得意なこと」はありません、という学習者

「読んだ後で」では自己分析をします。その項目に「長所」や「得意なこと」がありますが、そういった自分のよいところを「ありません」と言って探そうとしない学習者がいます。自分をよく表現するのが恥ずかしいという気持ちが強いのでしょうか。そのような時にはクラスメイトの出番です。周りの学習者に「〇〇さんのいいところ、上手なことを教えて」と声をかけてみてください。グループワークで活動するのもよいと思います。ただ、新しいクラスが始まったばかりで、学習者がお互いのことをまだよく知らないという場合も考えられます。そういった場合には「ほかの人から見た自分」の項目を先に考えてはどうでしょうか。長所や得意なことにつながるポイントが出てくる可能性があります。

- 読み手を設定して書く

このテキストの「書く」活動には「だれに向けて書きますか」という読み手を設定する問いが付いています。読み手を意識して書くことが目的です。学習者が実際に「書く」場面を考えてみると、日本語学校の学習者であれば作文のテストなど教師に評価されることを前提に書く場合もありますが、進学先や就職先でもそうでしょうか。学習者が書いたものを教師はもちろん評価しますが、「評価のための書く活動」というよりは「読み手に伝えたいことを伝えるために書く活動」と教師も意識してください。

- 自分のパフォーマンスを客観的に見る

この課では学習者がスピーチをしますが、今後、人前で発表したりプレゼンテーションをしたりする活動が続いていきます。そのような機会にはぜひそのパフォーマンスを録画することをお勧めします。学習者は恥ずかしがって嫌がることも多いのですが、日本語を使って何かをしている自分を客観視することは成長につながる機会だと考えます。自分のスピーチがどうだったか、その振り返りを記入するシートがダウンロードできますが、スピーチを終えた直後に記入することもできますし、録画を見てから記入することもできます。前者の場合は発表の熱が冷めないうちに、学習者が感じたことを記入しやすいかもしれませんが、後者の場合には録画を見ることで客観的に、冷静に自分のパフォーマンスを分析できるかもしれません。発表の直後に一度振り返っておいてそれを残し、次の授業の機会に録画を見て改めて振り返り、気が付いたことを追加するという方法もあります。

## ここに注意

- プレタスク2の適職診断は、学習者のレベルに合わせて診断テストを選びましょう。学習者に自由に選んでもらうと、診断テストの問題文を読むだけで授業時間が終わってしまうことになりかねません。診断テストには小学生や中学生向けのものもありますし、ゲーム感覚でできるもの、イラストが多く楽しみながらできるものもあります。教師はそのような材料選びはもちろんのこと（著作権が絡む場合もあるので、注意してください）、診断そのものをどう進めるか（個人作業で進める？ ペアやグループで進める？ これは診断テストの形式によっても変わってきます）、診断結果やそれに対する感想や考えをどうシェアするかも考えておく必要があります。
- 人前で発表したり（この課では自己紹介のスピーチです）プレゼンテーションをしたりする際、その発表がゴールであるかのように感じてしまいがちですが、「振り返り」をゴールに設定しましょう。評価表、振り返りのシートをうまく使って振り返りを進めてください。例えば、以下のような進め方はどうでしょうか。
  1. 録画を見て自分の振り返りをする。振り返りシートに記入する。
  2. クラスメイトからの評価表を受け取り、内容を確認する。  
どのような評価を受けたか、傾向や印象に残った評価などをまとめる。
  3. 自己評価と相互評価の結果を比べてみる。気が付いたことをまとめる。
  4. 評価の結果から、次回（今後）の課題を設定する。
  5. グループやクラスで4の内容について共有する（言語化して意識化することがねらいです）。

次回（今後）の課題は紙に書いたりデータに残したりしておいて、次の機会にその課題を改めて見ることができるようしておくといでしょう。



評価表や振り返りのシートは紙ベースで学習者に記入してもらう以外にも、Google フォームなどを使用して入力してもらうこともできます。どんな方法にも一長一短がありますので、都度、活動内容やかけられる時間に合わせて検討してください。

## 第2課 自己PR

### 進め方のポイント・アイデア

- 自己PRは何のため？

この課の自己PRは、進学や就職などの面接で実施するものを想定しています。聞き手が存在し、しかも、その聞き手に「この人が欲しい」と思ってもらえるような自己PRを目指します。ただ単純に自分が好きなことや得意なことを語るのではないことを学習者にも気が付いてほしいと思います。そのために、プレタスクの中に「自己PRはいつ必要になるのか」「進学や就職をしたら、何をどのようにアピールするか」という問いを準備しました。

あるクラスで「私は進学や就職をしない。マンガ家になる。」と言った学習者がいました。この学習者の場合には出版社に自分の作品を売り込むことを想定し、作品だけでなく作者にも興味をもってもらえるような自己PRを目標にしました。学習者ひとりひとりが自身の進路希望に合わせた自己PRを考えることができるようにサポートしましょう。

- 読み物が二つ

この課の「読んで考えましょう」は本文が二つあります。進学希望の学習者も就職希望の学習者も今後目にするであろう内容にしています。「読む」トレーニングですから、進路希望がどうかは関係なく二つ読むことを想定していますが、場合によっては進路希望に合わせてどちらかを選んで読むということもできます。

第1課にはありませんでしたが、この第2課以降「考えを広げましょう」がある課があります。本文の内容を理解した上で、更に広く、深く考えるきっかけとなるような発展問題の位置づけです。学習者同士が自分の考えをシェアする時間をとってください。

### ここに注意

- 「読んで聞いた後で」では自分の「強み」をまとめていきます。実際の授業で学習者の様子を見てみると、「強み」と日本語で聞いただけでその意味をきちんと理解できる人はそう多くないように感じます。その経験をもとに、いくつかの視点で「強み」探しができるように活動を構成しました。できれば複数の「強み」と言えるものを見つけて、アピールする相手に合わせて選んだり、組み合わせたりできるとよいと思います。

また、仕事の経験がある学習者はすでに自分の「強み」をよく知っているかもしれません。そのような学習者には生の例を出してもらったり、なかなか「強み」探しが進まない学習者のサポートをお願いしたりすることで、学習者同士のやりとりを増やすことができます。そのような学習者がいない場合でも、ペアやグループで話したり考えたことを共有したりする時間を作ると、一人で黙々と作業する時間が続くのを避けられます。学習者の様子を見て、一人で集中して取り組む時間、クラスメイトとシェアする時間などのバランスをとってください。

### 第3課 キャリアプランニング

#### 進め方のポイント・アイデア

- 第3課は各Unitのメインディッシュ

第3課にはプロジェクトワークが準備されていて、第1課と第2課で得た知識や考えたことをもとに、全ての技能を総動員して取り組みます。

「活動の前に1」はクイズ形式になっているのでゲーム感覚で進められます。「活動の前に2」には「活動1」で企業研究をするのに先に知っておくと便利な言葉がたくさん出てきますが、ひとつひとつ意味の確認をしていくのでは気が遠くなります。ペアやグループで「知っている言葉」「知らない言葉」に分ける作業から始めてみてください。自然に、知っている学習者は知らない学習者に教えることを始めます。この活動を進めやすくするために、テキストに赤字で出ている言葉のカードを作っておくのがお勧めです。言葉のカードの束をペアやグループに渡し、自分たちで机の上でカードを仕分けしながら、意味の確認をして、「知っている」「知らない」を整理します。最終的に「知らない」に残った言葉については、ペア同士やグループ同士をくっつけて聞き合う活動に広げたり、クラス全体で共有したりして、知っている学習者がいれば発言してもらい、誰も知らない言葉があればみんなで調べてみる、などして解決します。

赤字の言葉を理解するのに、黒字の部分を読むとヒントになりますし、給与に関わる数字や休日・休暇の種類、福利厚生や教育制度に関しては、学習者が自分の国（地域）ではどうかという話を始めたりして盛り上がりを見せることもあります。

- 悩ましいグループ作り

「活動1」はグループで進めます。そこで問題になるのが学習者をどのようなグループにするかで、いくつかの方法が考えられます。

#### 【例1】くじやトランプを使ってその場で決める。

- ☆ メリット：ゲームが始まるようで楽しい雰囲気になる。
- ☆ デメリット：教師側が実は避けたいと考えていた学習者同士の組み合わせになってしまう可能性がある。

〔例2〕まずは座席の近い学習者のグループを作り、興味がある会社が出そろってから改めて希望を取る。  
対象の会社に興味がある者が集まってグループになる。

- ◇ メリット：学習者が自分で調べたい会社を選ぶのでモチベーションが維持でき、同じような興味をもつ学習者が集まることで活動の活性化が期待できる。
- ◇ デメリット：自分の興味はさておき、仲の良い学習者が同じグループになりたくて同じ会社を選ぶ可能性もある。この場合、もともとグループメンバー同士の関係が良好であるはずなので、グループ活動はうまくいくかもしれない。ただ、授業の課題そっちのけて遊び始めてしまうかもしれない。

〔例3〕学習者のキャラクターや日本語力を考慮し、教師がグループ編成を決める。

- ◇ メリット：人的配置（リーダーシップのある学習者をグループに一人ずつ配置する、いつも一緒にいる学習者同士を離してみるなど）がバランスよくできる。
- ◇ デメリット：学習者が「決められた」グループで活動することになり、それが楽だと感じる学習者もいれば、つまらないと感じる学習者もいる。

〔例4〕条件（国籍バランスなど）を提示し、学習者にグループ作りを任せる。

- ◇ メリット：学習者に自分たちで活動していく意識をもってもらうことができる（かもしれない）。自分たちが決めたグループなのだから、と、責任感をもってもらうことができる（かもしれない）。
- ◇ デメリット：学習者同士の話し合いをうまく進めてくれる学習者がいない場合、話がまとまらない可能性がある（最終的に「先生が決めてください」となった場合があります）。このように、どのような決め方にもメリット・デメリットがあります。ですから、次にデメリットをできるだけ小さくするためにどうすればよいかを考えます。くじで決まったグループや学習者が決めたグループに不具合があると感じる場合、教師は「これはダメ」と頭ごなしに否定するのではなく、「ここは少し問題があると思いますがどうですか？」など、微調整に関しても学習者と相談をして決めるのがよいと思います。教師が考えたグループを提示する際にはあくまでも提案として、「このようなグループを考えてみましたがどうですか？」と声がけをして学習者の意見も聞くなど、大人対大人の、教室というコミュニティを構成する一員同士として、教師側の思惑と学習者側の思惑の折り合いをつける話し合いができればよいと思います。

- キャリアプランニング再び

「活動2」は、「つなぐにほんご 初級」を使用して初級の学習をした学習者にとっては2度目のキャリアプランニングです。少し視点が異なりますがUnit0の第1課で未来年表を作成したので、3度目と感じる学習者もいるかもしれません。自分がこれからどうなりたいかを考えるという点では共通していますが、それぞれ目的としていることが違います。この「活動2」では、自分が将来したいと思うことを掘り下げ、実現に向けてステップを設定し、より具体的に考えていきます。

「つなぐにほんご 初級」第28課のアクティビティーで作成した図や絵、Unit0第1課で作成した未来年表があれば、それらを使って自分が考えてきたことを振り返りながら、修正したり、合体させたり、新たに考えたり、自分自身の考えの変化も楽しむことができます。

- 言語化＝意識化

「活動の後で」では「活動2」で考えたキャリアプランを文章にして、それによって学習者一人一人の意識づけを図ります。将来したいことがはっきりしている学習者も、まだそうではない学習者も、今どう考えているかを文章にすることで今の自分を認識することができます。ただ何となく日本語を学んでいるのではなく、目的があって学んでいるということを改めて確認するよい機会にもなると思います。

## ここに注意

- グループ活動を進める際、学習者はすることを分担することが多いです。効率的に作業を進めるために分業することはよいのですが、発表がその個人作業のつぎはぎにしかになっていない、という状況は避けたいところです。数日間グループ活動が続きますが、その間教師は、①各グループの進捗を把握し、クラス全体としてのスケジュールを調整する、②各グループの活動の様子をよく観察し、必要であれば声かけや指導をする、といったことをします。

①の進捗は可視化することで把握しやすくなりますし、学習者同士、他のグループが何をしているかやどこまで進んでいるかを見たり聞いたりすることで刺激にもなります。スピーチや発表の日をいつにするか、その振り返りはいつか、準備にどれぐらいの時間が必要そうかなど、スケジュールも学習者と相談しながら決めていくとよいでしょう。

②については、観察していて「あのグループは全然話し合っていないな」「あのグループのあの人はずっとスマホを見ているが一体何をしているのだろう」など教師が気が付いたことは学習者に確認します。グループのリーダーや代表者を呼び出して状況を聞いて確認するということもできますし、グループ活動予定時間の半ばぐらいのところにあらかじめ進捗報告時間を設定しておき実施するのも教室活動に動きが出てよい方法です。

教師は学習者の主体的な活動を尊重しますが、ただ見守るのではなく、その活動がしやすい環境を整えサポートします。それと同時に学習者の力を伸ばす、引き上げるという役割もあります。指導が必要な部分はしっかりと指導し、学習者に考える機会を与えてください。

- 発表の準備ができたなら、リハーサルを実施しましょう。本番と同じように一度発表してみます。それを録画しておいて、自分たちでそれを見て改善点を見つけたり、他のグループの学習者に観客になってもらいアドバイスをもらったり、本番まで発表内容を秘密にしたいということであれば教師が観客になったり、いろいろな方法が考えられます。スケジュール相談の際に、発表の前にリハーサルの日や時間、リハーサルを受けての修正のための時間もしっかり組み込みましょう。

発表では、自分たちが伝えたいことが伝えられるかだけではなく、聞き手が聞いてわかるかどうかを確認することも大きなねらいです。リハーサルでは、聞き手がわかっているかどうかに関心を配りながら話すように指示をしましょう。

## Unit2

最終更新日:2024年5月1日

### Unit2 のねらい

日本の文化や習慣の特徴を理解して、伝えることができる。

### Unit2 の概要

言語を学ぶことはその文化を学ぶことでもあります。外国人材と共生社会を生きる时候にも、日本の文化について自分の考えを述べたり、意見交換をしたりすることもあります。Unit 2では、学習者一人一人が感じている「日本」「日本文化」「日本の習慣」について紹介し合って、自分とは異なる見方や考え方を知ること、その活動を通して自分の国を振り返り新たな視点をもつことが課題です。

第1課は、自分が住んでいる町、あるいは住んでいた町を紹介する活動です。自分の国や町を紹介するときのポイントを考えて、伝えることができるようになることが目標です。

第2課は、日本の伝統的な文化について課題文（「尺八」）を読み、さらに聞きます（「忍者」）。それらの活動を通して日本文化の特徴を考えます。

第3課は、今の日本社会に目を向けて、「クール」だと思うものを調べて発表します。グループでスケジュールを立てて活動を進めます。

### 進め方

#### 第1課 私の町

##### Can do

- 1 町を紹介する文章を読んで、その町の特徴を理解することができる。
- 2 自分の国の町の特徴を、日本の町と比較しながら伝えることができる。

自分の国のことや自分の国の町について話すことができることは、自己紹介の一環として必要なことです。また、それらを日本と比較しながら話すことができれば、よりわかりやすく伝えることができるだけでなく、自分の理解を広げたり、深めたりすることにもなります。

「プレタスク」では、自分の町を紹介してみます。紹介する前に、どんな点について紹介するかを考えて、メモを作ります。そして、互いに紹介し合います。聞き手は、聞いてわかったことをメモします。

続いて、「読んで考えましょう」では、自分の国の町を紹介する文章を読みます。タスクは、筆者の国はどこかを讀んだ内容から推測することです。タスクの答えを考えるために、自然と読み深めること、精読が行われます。まず一人で読んで、タスクの答えを出した後、ほかの学習者と意見の交換をします。このやりとりの中でも、より詳しく読み取る作業が起こるでしょう。タスクに答えるというクイズとしての要素があることで、読みの活動が活発に行われます。さらに、同じ文章を読んでも、注目する点が人によって異なり、それがタスクの答えに影響することも実感できます。

また、この文章の流れや表現は自分の町を紹介するときにも使えますので、しっかり音読練習をすると、より豊かな話し方ができるようになるでしょう。

「讀んだ後で」は、讀んだ文章を参考にして、自分の町を日本の町と比較しながら書きます。比較することは、伝えたいことを明確にするときや詳しく説明するときの重要な方法です。ここで実際に比較しながら説明することを試みてください。

## 第2課 日本の文化

### Can do

- 1 日本の文化について書かれた文章を読んで、理解することができる。
- 2 自分が関心をもっている日本の文化・習慣について伝えることができる。

日本のポップカルチャーは広く世界に広まっています。まんがやアニメを通して日本に関心をもった人も多くいます。この課では、あえて日本の伝統的な文化と、そこに関心をもつ外国人がいることを紹介します。これまでとは異なった視点で日本文化を見ること、そこで気づいたことを紹介することが課題です。

まず、「プレタスク1」では、自分が知っている日本文化はどのようなものかを確認します。そのうえで、「プレタスク2」では、「伝統的な文化」「新しい文化」という視点で日本の文化を見てみて、クラスメイトと気づいたことを話し合います。

それを踏まえて、「読んで考えましょう」では、日本の伝統的な楽器「尺八」に魅力を感じて、尺八の作り方を学ぶために来日したイタリア人の話を読みます。

続いて、「聞いて考えましょう」では、同じく日本の伝統的な文化である「忍者」になりたい、そして「忍者」を広く知ってもらいたいと考える外国人の話を読みます。どちらも、日本の若者にはあまり関心をもっている人は多くなく、この文化を繋ぐ人がいなくなることが心配されています。

最後に、「読んで聞いた後で」は、自分が関心をもっている日本の文化や習慣をほかの人に紹介します。話す前に、紹介したいことをメモし、紹介文を書きます。今回は、紹介文を読んで発表します。互いに発表を聞いて、感想を書いて、評価をします。また、自分の発表がどうだったか、振り返って、自己評価をします。

### 第3課 クールジャパン

#### Can do

- 1 自分が関心をもった日本の文化や習慣について理解を深めるために、調べて、その結果を伝えることができる。
- 2 日本の文化や習慣について、知っていることや自分が思っていることを話すことができる。

第3課は、自分が「クール」だと思っている日本の文化や習慣をほかの人に伝えることが課題です。「クール」とは、英語の cool で、口語として「すてきな」「すばらしい」「かっこいい」といった訳が辞書にあります。

「活動の前に」で、よくメディアでとりあげられている「並んで待つ」ことや、「ごみを分けて捨てる」ことなどを参考に、どんなことに「クール」だと感じるかを話し合います。

そして、「活動」では、グループで相談して「クールジャパン」として取り上げること、そのために調べること、体験してみることなどを話し合って決めます。決めたら、具体的な行動計画を立てて、実行します。実行したことをまとめて、発表をする準備をします。どんな発表の仕方をするかも考えます。準備ができたなら、発表の練習をします。

互いの発表を聞いて、感想と評価を書きます。また、自分たちの発表を振り返って、自己評価をします。

その後、「活動の後で」では、口頭で発表したことを SNS に掲載する「記事」にします。記事にするにあたっては、だれに向けて書くかを学習者が考えます。書けたら学習者同士で読んで、気が付いたことを話し合って、リライトします。できた記事をほかの学習者に読んでもらって、コメントを書いてもらいます。

最後に、第3課と Unit 2 全体を振り返って、目標の Can do がどれくらいできるようになったかチェックをします。



## 各課のポイント

## 第1課 私の町

## 進め方のポイント・アイデア

- 「私の町」は私の国の町じゃないとだめですか？

第1課のタイトル「私の町」は学習者が生まれ育った国や地域の町を想定しています。その町に関するさまざまなことをよく知っているだろうと思われるからです。ですが、実際の授業では、プレタスクを始めた際に「私が育った町には紹介したいことがないから、よく知っている他の町を紹介したい」という学習者がいたり、「今日本で住んでいる町がとても面白いので日本の町を紹介したいんですけど、いいですか？」という学習者がいたりしました。もちろんOKです。学習者の「これについて話したい、紹介したい」という気持ちを尊重して結構です。が、じゃあ学習者が選んだ町ならどこでもいいのか、と言うと少し違います。プレタスクの後、「読んで考えましょう」や「読んだ後で」の活動につながるようにしたいので、その町での生活がどのようなものであるか、特徴的な事柄や抱えている問題点などについても考えられる町を選んでほしいと思います。そして自分が育った町以外の町を選んだ学習者には、紹介の際にぜひ、なぜ自分が育った町ではなくその町を紹介したいと思ったのかも話してもらいましょう。「私が育った町はとても小さい町で特別な特徴があまりないけど、隣の〇〇という町は…」などと、自然と「比べる」視点で話すことができるかもしれません。

- スマホの使用を制限する？ しない？

今、私たちは何か分からないことがあるとスマホを使ってすぐに調べることができます。学習者も日々の生活でスマホを駆使しているはずです。日本で生活していて何かよく分からないお知らせを受け取った時、そのメッセージをスマホのアプリに丸ごと翻訳してもらって理解している学習者もいるでしょう。

学習者の「読む」力を育てようと思うとき、授業の読解の時間を学習者の実生活での「読む」活動と同じだと捉え、読んで考え実行するという過程を踏みます。ということは、実生活での「読む」活動が翻訳アプリや検索機能に頼ったものであるとしたら、日本語学習の読解の時間もそれらに頼った活動にするべきでしょうか。この質問に「そうだ！」と即答する教師はいないのではないかと思います。「できれば自力で読んでほしい」「できるところまでは自力で頑張っ、それでも足りない部分は調べてもよいが…」と考える教師が多いのではないのでしょうか。

第1課の「読んで考えましょう」のタスクの答えを考える際、本文から読み取ったいくつかのキーワードを使って検索すると、この留学生の国や町だろうと思われる国名や都市名が出てきます。キーワードを見つけるためにはしっかり読むことが必要なので、スマホの使用を制限せずに、学習者同士がやりとりしながらキーワードを選び、スマホを使って調べてタスクの答えを準備するという活動ができます。ただ、スマホで調

べてあっさり答えが出てしまう（しかもどのグループも同じ答えになってしまう）のは面白くありませんし、この活動のねらいは、正しい答えを出すことではなく、学習者同士がやりとりをしながら読みを深めていくことです。そのために例えばスマホの使用を制限する時間を設けるといったことは、実生活での「読む」活動とは少し異なる環境にはなりますが、学習者同士のやりとりを活発にするのに有効です。

例えばこのような進め方はどうでしょうか。まず、スマホの使用を制限して、一人で自力で読んでもらいます。ミニホワイトボードに自分の答えを準備したら、ペアやグループでその答えを見せ合います。その時に、ペアやグループに世界地図や地図帳を渡します。まだスマホの使用は許可せず、地図を見たり、本文を読み直したりを繰り返しながら話し合ってもらい、ミニホワイトボードにグループの答えを準備するよう指示します。スマホを使わなくても答えがまとまるグループもあれば、まとまらないグループもあるでしょう。調べさせてくれ！ とお願いしてくる学習者もいるかもしれません。そこまで話し合いが進んだところで、スマホ解禁を宣言します。ただ、ここで学習者に伝えたいのは、もし調べて分かったことが自分たちが話し合った結果と違って、自分たちの答えをナシにしないでくださいということです。この後グループの答えをクラス全体にシェアする時間をとりますが、その時にはまず自分たちが考えた答えとその理由を説明してもらい、それに加えてスマホで調べて分かったことやそれに対する考えも話してもらいます。

「タスクの答えを考えましょう」はとにかく自分たちで考えてほしいからスマホを使わずに活動してもらう、というのも一つの方法です。「読んで考えましょう」では言葉の意味を調べたい学習者がいるかもしれないからスマホはOKにして、「タスクをもう一度考えましょう」では再度スマホは制限して、そこまで分かったことをもとにもう一度よく考えてもらう、ということもできるでしょう。正解はありません。活動のねらいに合わせてスマホの使用についても決めてください。

## ここに注意

- 「書く」活動で使っていただけるよう、原稿用紙と評価表・振り返り表がダウンロードできるようになっています。どうぞご活用ください。
- Unit 1 から Unit 5 まで、「書く」活動が繰り返し登場します。その全てにダウンロード教材が準備してありますが、それを使わなければいけないというものではありません。手と鉛筆と紙を使って書く回もあれば、パソコンを使って書く回があってもいいですし、評価や振り返りのポイントもぜひ学習者に合わせて設定してください（学習者と話し合って決めるのも一つの方法です）。
- 「評価表」となると構えてしまう学習者がいるようですが、大き目の付箋を準備して評価のポイントはモニターに映し出しておき、「コメントを書いたら作文に貼ってあげてください」と指示をしたところ、思いの

ほか積極的に取り組んでくれたクラスがありました。形式を変えると学習者の気分も変わります。マンネリ化を防ぐ工夫をしていきましょう。

## 第2課 日本の文化

### 進め方のポイント・アイデア

- それって日本文化？

第2課のプレタスクでは「日本文化」について考えます。学習者に「日本文化だと思うものは何ですか？」と問いかけると、さまざまな答えが返ってきます。あるクラスでこの問いに、「桜！」「富士山！」「天ぷら！」といった答えが出てきたことがありました。それを答えた学習者の頭の中はおそらく「日本といえば…」で、思いついたことを口にしたのでしょう。桜や富士山や天ぷらを日本を象徴するものとして認識しているのだと思います。それはその通りでよいのですが、「日本文化＝桜、富士山、天ぷら」なのでしょうか。そのクラスで答えを聞いていた学習者が「桜は日本文化じゃなくて、お花見が日本文化じゃないですか？」と発言してくれました。その後、他の学習者も交えて「桜」が何か、「お花見」が何かを確認する時間があり、結局は「お花見」が日本文化の一つだと落ち着きました。同じように、「富士山」については「日本人はみんな富士山が好きだ」ということから「富士山を日本のシンボルとして愛する心（この表現は第1課の本文の中から引用していました。よほど印象的だったようです。）」が日本文化、「天ぷら」については文化遺産に登録されているから「和食」が日本文化だという話し合いが行われました。これは学習者が気付いて発言してくれたことから話し合いに発展し結果が出た例ですが、学習者同士では気が付かない場合も考えられます。その時には教師が更に問いかけ、学習者の気づきを促してください。

教師の推測力は素晴らしいもので、「桜！」と聞いたら「お花見のことを言っているんだろうな」とか、「天ぷら！」と聞いたら「日本料理のことを言いたいんだろうな」と学習者が本当に言いたいことを推測して納得できてしまう場合があります。ですが、実はそのような場面に学習者にとっての新たな学びがある可能性があると思います。「文化」という抽象的なものを説明するための語彙や表現が増えるだけでなく、抽象的な概念について考える機会にもなり得ます。この活動に限らず、学習者の発話からその意図を教師が推測してしまわないことが大切です。

### ここに注意

- 第2課の「読んで聞いた後で」では、日本の文化や習慣を紹介する文を書いて、それを読んで発表します。発表の前に「書いた紹介文を声に出して読んで、発表する練習をしましょう」という活動があります。方法はさまざまありますが、聞く人に伝わる発表にするための練習です。一人でぶつぶつ読む練習をしたり、自分で録音して聞いてみたり、個人練習はもちろん必要でしょう。それが終わったらぜひペアやグループで、

聞く人がいる状況でも練習をお願いします。聞く人には、分からないことがあったら「分からない」と言ってよいこと、それがお互いの発表をよいものにするために大切なことだと伝えましょう。

文字を見せずに、音だけで内容を理解してもらうことは簡単なことではありません。学習者が作文を書く時点で、辞書を使って難しい言葉を使っていたらなおのこと、クラスメイトはその言葉を音で聞いてだけでは分からない可能性が高いです。とはいえ聞く方の学習者も、聞きながら、考え、分からないことがあれば推測するはずで、です。ですから、書く際に難しい言葉を使ってもいいとはいけないとかそういうことではなく、発表の際に聞く人の様子を見る余裕があるぐらいまで練習をしてほしいと思います。作文用紙から目を離さずに一方的に読み上げる発表ではなく、ときどき聞いている人の反応を見ながら、場合によっては、伝わっていないような時には他の言葉や表現に言い換えたりしながら、「伝わる」発表ができるようにしましょう。

### 第3課 クールジャパン

#### 進め方のポイント・アイデア

- 初めての My Can do

Unit 1 の第3課にはありませんでしたが、Unit 2以降、各 Unit の第3課のはじめに自分の目標となる My Can do を考える時間をとります。

これから第3課でどのような活動をするのか確認をして、その活動を通して自分ができるようになりたいことは何かを考えます。学習者ひとりひとりの、個人的な目標を設定する時間です。実際の授業の様子を見てみると発表に関する目標を設定する学習者が多く、Unit 1 の時よりも上手に発表したい、スライドをきれいに作りたい、といった声が聞こえます。それを「～できる」の文にしてもらう際には、例えば「聞いている人の顔を見ながら発表することができる。」「発表を聞く人が見やすく分かりやすいスライドを作ることができる。」のように、より具体的な目標になるように声がけします。目標は評価につながります。第3課の最後に My Can do についても自己評価をするので、評価できる内容を目標に設定するよう促してください。発表以外のことにに関する Can do ももちろん設定できます。「グループのメンバーとよく話し合って活動することができる。」や「日本語のサイトを見て日本の文化や習慣について調べることができる。」といった My Can do を設定した学習者もいました。先にも書いた通り、My Can do は学習者の個人目標です。自分で設定して自分で評価することに意味がありますから、教師があれこれ口出しする必要はありません。ただ、「何を目標にしたらいいか検討もつかない」というような学習者がいた場合には、「こんなことを頑張ったらレベルアップできますよ」とか、「これができたら活動がうまくいくかもしれませんね」とか、その学習者に合わせた目標を提案してみてください。

また、Unit 1 の各課で実施してきた発表などのフィードバックの際に「今後の課題」を見える形で残してきていると、その中から今回の My Can do に結び付けられるものがあるかもしれません。自分で見つけた自分の課題に、この機会に取り組むと自分で決めて、行動し、どうだったか振り返り、また新たな課題を見つけるといったことを繰り返すことは学習者の主体的な学びにつながります。それがしやすいように教師はサポートします。例えば「今後の課題」をデータ化し個人フォルダに残していつでも見られるようにしておき、必要だと思われる時にはそれを見ることを指示し、評価の機会にはクリアした課題にチェックを入れていくようにするなど、学習者が「できた!」「できるようになった!」「できることが増えた!」と思えるような仕組みを考えましょう。

- 「クール」の意味

第3課に入る際、まずタイトルを確認すると思います。「クールジャパン」がどのような意味なのかを学習者と話し合ってください。「クール」には「すてきな」「すばらしい」「かっこいい」という意味があることを確認しておきます。後でグループで「クールジャパン」として何を取り上げるか相談しますが、ある学習者にとってクールだと思える事柄が、別の学習者にとってはクールではない、ということもあり得ます。なぜクールだと思うのか、理由も合わせて話すよう指示してください。クールだと思う背景に、その学習者のもつ文化との違いがある場合もあります。そういった理由を聞けば「なるほど」となり、相互理解が進むことが期待できます。

## ここに注意

- 「クールジャパン」のテーマとしてアニメやマンガを取り上げた場合、発表の準備段階から著作権を侵害しないよう注意が必要です。学習者が忘れてしまっているようなら、ここで Unit 0 の第3課を改めて取り上げるのも一つの方法です。
- Unit 2 に限ったことではありませんが、スライドの作成や壁新聞の作成などで、PC 操作や絵を描くのが得意な学習者が作業を一人で進めることがあります。グループで話し合ってそう決まり、本人が納得して作業をしているのであれば問題はないのかもしれませんが、果たしてほんとうにそうなのか教師はよく観察し気を配る必要があります。いくら PC 操作が得意、絵を描くのが好きでも、自分一人が頑張っただけで学校でも自宅でも作業をして、他のグループメンバーは自分の発表担当部分の準備だけをしてあとはおしゃべりしている、ではいい気持ちはしないでしょう。グループの中で、スライドや壁新聞の進み具合はどうか気にしたり、どんなデザインやレイアウトがいいか意見を出し合いながら進められるようサポートします。グループのリーダーに「今、〇〇さんが一人で作業しているように見えますが、どんな状況ですか?」と声をかけたり、場合によっては担当者本人に「〇〇さんの作業が多いようですが、どうですか?」と聞いてみたりして、必要であれば、グループ活動がうまく進むようアドバイスをしたり、グループの話し合いに加わったりすることもあります。

しかし、学習者の様子をよく観察し、必要だと判断をして学習者に声をかけても、その学習者が本音を話してくれるとは限りません。あるクラスで、壁新聞の作成をほぼ一人で頑張っている学習者がいました。グループ活動中や授業後に声をかけた時は「大丈夫です」という返事だったのですが、発表を終えた後で大爆発しました。その学習者は「この壁新聞は私が頑張って作った。作るのが好きだからそれはいいが、グループの〇〇さんは何もしなかった。他のみんなは少しずつ手伝ってくれた。でも〇〇さんはこの壁新聞を使って発表だけを頑張った。私はそれが嫌だ。次の発表は〇〇さんと一緒にしたくない。」と主張しました。名指しされた学習者にも言い分はあり、「絵を描いたりするのが苦手な自分が手伝うと迷惑になると思った。だから別のことを頑張ろうと思った。」ということでした。このような衝突はできれば避けたいことではありますが、日本語で状況や感情を一生懸命伝える学習者の姿に感心したのと同時に、グループ活動そのものが学習者の社会活動でもあると再認識しました。その後、このようなすれ違いをなくすにはどうすればよいか、他の学習者も意見やアイデアを出し合い、次のグループ活動がうまくいくようクラス全体で考えることができました。

学習者のグループ活動に教師がどこまで関わるかは悩ましい問題です。学習者の主体性や意向を尊重しますが、軌道修正をしたり、時には衝突の仲裁に入ったり、その時その時の状況を冷静に見極め学習者に関わっていきます。まずは学習者の活動の様子をよく観察し、状況を把握することに努めましょう。その中で「あれ？」と思うようなことがあれば、その場で対応が必要か、もう少し様子を見るか、他の学習者や教師の協力を得るかなどを考えます。教室（クラス）は一つのコミュニティーです。私たち教師も自分たちはそのコミュニティーの一員としてどうふるまうべきか、コミュニティーを「よい場所」にするために、自分たちはどうすればいいのかを考えるのはとても大切なことです。

## Unit3

最終更新日:2024年5月1日

### Unit3 のねらい

- 1 「異文化理解」について考えることができる。
- 2 地域の文化を理解し、その地域社会の一員である「市民」としての意識をもって、考えたり行動したりすることができる。

### Unit3 の概要

Unit 3では、自分が社会の中のどこに所属しているかを考え、その社会の一員であることに気づくことが課題です。

第1課では、異なる言語や文化を持つ人たちの関わり方について考えます。課題文を読んで、異文化理解の基本となる考え方を学びます。その後、「異文化」を体験するためにゲームをします。

第2課では、災害時にどうするかを通して、自分が今住んでいるところの一員であることに気づき、どう関わっていくかを考えます。課題文を読んで、「共助」について考え、実生活で自分が困ったときにどうするか、近隣の人が困っているときに自分はどうか、を考えます。

第3課では、いろいろな言語や文化を持つ人がともに暮らす社会、「多文化共生社会」について考えます。まず、「多文化共生社会」とはどのような社会かを資料をもとに考えます。そのうえで、その社会の一員としてどう行動するかを考え、行動します。

Unit 3の活動の後作業として、活動を報告するためのレポートを書きます。

### 進め方

#### 第1課 異文化理解

##### Can do

- 1 異文化体験について、まとまりのある話を聞いたり話したりすることができる。
- 2 異文化理解に関する簡単な文章を読んで、理解することができる。



第1課は「異文化理解」について学ぶことが課題です。

まず、「プレタスク」で、「異文化体験」についてこれまでの経験を話し合います。本書は、来日して日本語を学習する学習者を想定していることから、「日本に来て、自分の国と違って…」と書いていますが、そうではない場合は、日本に限定する必要はまったくありませんので、自分の国とは異なる国や地域で「異文化」を体験したことを話し合ってください。

続いて、異文化に接したときに起こる「カルチャーショック」に関する説明文を読みます。これまでの日常生活に関する文章とは違って、内容も表現もアカデミックで専門的な文章です。「プレタスク」で話し合ったことを背景にして読み進めて、タスクの答えを考えます。文章で説明されている内容と実際の場面を合わせて考えることがポイントです。急がずに、ゆっくり話し合いながらわかったことを確認して読み進めてください。

「読んだ後で」では、「バーンガ」という異文化体験ゲームをします。異なるルールのグループに1人入ったときに感じる不安やまどいが、異文化体験に通じると考えています。まず、ゲームのルールを2～3人のグループで読みます。トランプを手にしながらかく実際の場面とつながるでしょう。ステップ1を読んでやってみた後で、ステップ2を読んでやってみます。

ゲームが終わったら、ゲームの間に感じたことを話し合います。

その後で、「異文化理解と異文化適応」というテーマでこれまでの体験について具体的に話し合います。話し合った後、そこで考えたことを書きます。書いたらお互いに読み合います。

終わったら、第1課を振り返って、目標のCan doがどれくらいできるようになったかチェックをします。

## 第2課 地域社会との関わり

### Can do

- 1 地域の助け合いに関する記事を読んで、理解することができる。
- 2 災害や事故が起こったときにどうしたらいいか、話し合うことができる。

今学習者が生活している環境が、自分が生まれ育った地域であっても、異なる地域であっても、自分がその地域の一員であるという自覚をもつことが課題です。

そのために、「プレタスク」では、今の自分を振り返ります。そして、災害時にどのように行動するかを考えてみます。学習者同士で考えたことを話し合いながら進めてください。

それを踏まえて、「共助」について実際にあったことの新聞記事を読みます。「共助」とはどのようなことを言うのかを考えながら読み進めます。そして、わかったことを学習者同士で話し合い、自分の周りにそのようなことがあるかどうか考えます。

さらに、「聞いて考えましょう」では、同じく「共助」のニュースを聞きます。ニュースの内容をメモしながら、聞いてわかったことを学習者同士で話し合いながら、全体がわかるまで聞きます。

そして、「読んで聞いた後で」では、地域社会の一員として災害時にどうすればいいか、どんな備えをすればいいかを考えて書きます。学習者同士で、何を書くか、どう書くかを話し合います。書けたら文章を互いに読み合って、感想を言い合ったり、意見を言い合ったりします。

終わったら、第2課を振り返って、目標の Can do がどれぐらいできるようになったかチェックをします。

### 第3課 多文化共生社会

#### Can do

- 1 「多文化共生社会」がどのようなものかを知り、自分が住んでいる地域の現状や取り組みについて調べ、その内容について考えたことや意見を伝えることができる。
- 2 「多文化共生社会」を目指す地域の「市民」として、自分は何をしたらいいか考えることができる。

日本政府は2018年12月に「外国人材の受入れ・共生のための総合的対応策」を出して、日本が異なる文化をもつ人たちとともに共生社会を築いていくと宣言しました。それに伴って、外国人材を受け入れるにあたっては日本語教育を提供できるようにするとし、翌2019年には「日本語教育の推進に関する法律」を公布、施行しました。

本書は、本書の考え方⑤で「複言語・複文化のコミュニティで生きる「市民（シティズン）」としての意識を育てます。」としていますが、現在の状況を見ると、「複言語・複文化主義」は一般的な考え方になっているとは言えません。そこで、第3課では、まず「多文化共生社会」を考え、そこで自分は何ができるかを考えることとしました。将来は、「複言語・複文化のコミュニティ」を築いていくことを考えてほしいと思っています。

「活動の前に」では、「多文化共生社会」がどのようなものか、データをもとに考えます。書籍に掲載しているのデータは書籍制作時のものですので、実際にお使いになるときのデータにアップデートしていただきますようお願いいたします。p.112「資料3」は例として横浜市鶴見区を取り上げていますが、学習者の住んでいる地区についてデータを調べて、考えてください。

そして、「活動」では、自分が地域社会の一員として何ができるかを考え、行動することを課題としました。グループに分かれて活動をします。活動の流れは、[企画] → [スケジュール策定] → [活動] → [まとめ] → [報告] → [フィードバック] です。

始めにグループで企画ができたら、企画発表会をして意見交換をし、さらに企画を見直します。実現可能な企画にすることがポイントです。また、企画を実行に移すにはどんな準備が必要かも考えて自分たちで対応します。成果のまとめも、これまでのものよりは大変になると思われます。何を伝えたいかをよく考えて、聞いている人に伝わるようにすることがポイントです。

「活動の後で」では、「活動」の報告レポートを書きます。p.120に「書くことの例」、p.121に「紙面構成の例」を示しました。初めて書くレポートですので、教師に何を書くか報告させたり、書けたところまでを見せにくるように指示を出して、サポートしてください。

レポートが書けたら、互いに読み合って、感想を述べたり、評価を書いたりします。

自分でも振り返って、評価をします。

最後に、第3課とUnit3全体を振り返って、目標のCan do がどれくらいできるようになったかチェックをします。

## 各課のポイント

### 第1課 異文化理解

#### 進め方のポイント・アイデア

- プレタスクで言葉や表現を目にしておく

第1課のプレタスクには「解決する」「原因」「ショックを受ける」「ストレスを感じる」「適応する」「経験」といった硬い言葉や表現が出てきます。まだその意味を知らない学習者がいるようであれば、知っている学習者が教えたり、自分で調べたりして意味を確認していきます。教師が他の言葉や表現を使って言い直して意味を確認するということが必要な場合もあると思います。これらの言葉や表現は、次の「読んで考えましょう」につながるもので、先に知っておくと本文を読む際に言葉や表現の意味が分からなくてつまずくということを減らすことができます。プレタスクは学習者が言葉や表現の意味を知って覚えることが目的の活動ではないのですが、教師側は次の活動をスムーズにするためのポイントの一つであることを認識しておいてください。

## ここに注意

- 「バーंगा」は学習者が授業であることを忘れて楽しめるゲームです。普段自分からはあまり発言しない学習者が急に率先してカードを配り始め、グループメンバーと話しながらルールを確認するというリーダーシップを発揮し、ステップ2では身振り手振り（筆談まで！）を駆使してゲームを進めようとする意外な一面が見られたりしました。楽しんでゲームをするのはもちろんいいのですが、大切なのはその後です。ゲームが盛り上がりすぎてそれだけで授業が終わってしまった、とならないように時間の調整をして、テキストのp100、ゲームの後の活動にしっかり時間をとってください。ゲームをゲームで終わらせないための大切な活動です。このページの活動を「バーंगा」を実施した翌日にすることはお勧めしません。学習者の熱が冷めないうちに話し合いを展開しましょう。

2の「2）同じような気持ちになったことがありますか。」の質問は、バーंगाで感じた気持ちを実生活で感じたことがあるかどうかを聞いています。もし学習者がこの問いに戸惑う様子が見られたら、教師が自分の例を出してみるとイメージしやすくなると思います。1）でどんな気持ちかしたのは学習者からいろいろと出てくるはずですので、それらに合わせて教師も自分が同じような気持ちになった経験があるか考えてみてください。

- この課の最後に「書く」活動がありますが、ここでは書いたものを学習者同士が評価することはしなくてもよいとしています。そのため、評価表や振り返りシートのダウンロード教材ありません。学習者同士で読み合う活動はありますので、その際に評価してもらっても構わないのですが、ここでの「書く」活動は読む人に伝えるために書くというよりも、自分が考えたことをまとめたり、整理したりして落ち着かせることをねらいにしています。

## 第2課 地域社会との関わり

### 進め方のポイント・アイデア

- 何のためのチェック？

第2課のプレタスクは、学習者が住んでいるところについて、そして近所の人との関わりについて自己チェックすることから始めます。授業でこの活動をした際、「留学生は孤独だ」と言った学習者がいました。ルームメイトはおらず、隣の人も近所の人も知らない、挨拶を交わす人もいない、学校に来ればクラスメイトと先生はいるけれど学校でしか会わない、アルバイトはしていない、塾の授業はオンラインで講義を聞いているだけ、と説明してくれました。国には家族や友達がいるし、近所の人とも挨拶をしたり話をしたりするけれど、日本に来てからは本当に一人だ、と自分の国での状況も交えた話に、他の学習者も「うん、うん、そうだ」と頷きながら聞いている人が多かったです。その時、教室全体がなんだか寂しくもの悲しい雰囲気包まれた感じがしましたが、この活動の目的はそのような現状を悲観することではありません。その話を

聞いても特に反応を示さなかった学習者にどう思うか聞いてみたところ、「私たちは日本では外国人だから仕方ないです。でも私はそれ（他の人と関わりをもたないこと）が気持ち楽でいいです。」という答えでした。それに対し「外国人だけど、私は日本人の友達もいるし他の国の友達もいて寂しくないです。外国人だから孤独なのは仕方ないというのはちょっと変。」という学習者もありました。

この活動を通して学習者には、まずは自分が今現在置かれている環境や状況を認識し、どう感じるかに気が付いてほしいと思います。日本社会で「外国人」である自分がどうありたいのか、という壮大なテーマですが、その一例としてここでは近所の人（周りの人）とはどのような関わり方を望むのか、考えます。他者との関わりは必要ないと考える学習者がいてもよく、その人はその人でこの後の活動を通して考えが変わったり変わらなかったりするでしょう。このプレタスクには、自分が社会や地域の一員であることを自覚し、今後どう行動していくかを考えることにつなげていくねらいがあります。セルフチェックをして、その結果をクラスメイトと共有して「ハイ、終わり」にもできてしまいますが、そこ止まりではなく「だからどうなのか、このままでいいのか、どうしたいと思うのか」といったところまで学習者の思考を深める授業展開にしましょう。

### ここに注意

- 第2課は「災害時にどうするか」の切り口で地域社会との関わりについて考えていきます。おそらく、災害時に備えて近隣の人とは日頃からコミュニケーションをとっておくのが望ましい、というような話が出てくるのではないのでしょうか。そのような話し合いの中で学習者の視野を広げる問いかけをしておくと、第3課に入りやすくなると思われます。例えば、「災害時に助け合えるように、地域の近隣の人とは普段から関わりをもっていたほうがいい」という理想と「自分は外国人だから、地域の人と関わりをもつと言ってもなかなか難しい」という現実があることを認識した上で、日本は自然災害の多い国である事実、日本に住む外国人の数が増えている事実について触れ、日本社会の現状とこれからどうなっていくのかがいいかを考えるというのはいかがでしょうか。このような話し合いができていると、学習者は第3課で「多文化共生社会」が突然現れたものではなく感じられるのではないかと思います。

## 第3課 多文化共生社会

### 進め方のポイント・アイデア

- 「活動の前に」では「多文化共生社会」について知識を得て、考えていきます。いくつかの資料をテキストに載せていますが、指示文にもある通り、学習者が最新の情報を調べる時間もとりましょう。

この「活動の前に」は、学習者が「多文化共生」を自分事として捉えるきっかけになることをねらっています。日本社会に外から入ってきたお客様として続けるのではなく、多文化共生社会をつくる一員として、

希望することを考えてみたり、今ある外国人に対するサポートがどのようなものでなぜ必要なのかを考えたりします。それから自分がどう行動するか、です。住んでいる地域のサポートを利用してみようとか、イベントに参加してみようとか、自分が「こうなったらいいな」と考えていることについて投書してみようとか、実現できるかどうかは分からなくても、まずは行動を起こそうと考えてほしいと思います。「多文化共生」はどこかのだれかが言っている自分に関係のないことではなくて、学習者一人一人、自分自身が今まさに「多文化共生社会」の中にいるということを感じられる活動になることを目指します。

- 「活動」では、学校の周辺地域や住んでいる地域などにつながるために何をするか考えて、それを実行します。テキスト p.115 のイラストで、「活動の前に」で学び考えたことを整理して、自分が属しているコミュニティを構成する市民の一人であり、他の市民と対話することで多文化共生社会を実現していくことを確認してください。その後で、グループで「活動の前に」の最後に考えた自分がやってみようと思うことを出し合ったりして、グループでどのようなことをしようと思うか考えていきます。この時、学習者から必ず出る質問が「これ、本当にしますか？」です。「はい、します。するつもりで考えてください。」と答えてください。現実的に実施が難しい状況もあるかもしれませんが（コロナ禍がそうでした）が、Unit 3 の第3課では調べたことや考えたことを発表するのが「活動」ではなく、実際に行動して、その実施内容や感じたこと・考えたことを報告し合うのが「活動」です。企画発表会の後に企画内容を見直す時間をとりますが、企画の段階から実行することを見据えて話し合うよう促します。実行することを前提に企画し、それを企画発表会で発表して、聞いていたクラスメイトから意見や感想や実行のためのアドバイスなどをもらい、再度企画を練ります。この時にグループの編成をし直すという場合も考えられます。

企画内容として、コミュニティを構成する市民同士の対話が実現するような活動が望ましいのですが、ここでいう「対話」は「相手と直接、日本語で話すこと」という限定的な意味合いではありません。もちろんそのような機会がうまれる活動も考えられますし実行できたら素晴らしいのですが、もう少し広い意味で、「相手に働きかける」「触れ合いをもつ」「間接的に関わりをもったり影響を与えたりする」ということも「対話」に含むと考え、教師は学習者が考える企画内容が目的に合っているかどうかを検討してください。

- 学習者が実際に考え実行したことの例をいくつか紹介します。

#### ①学校周辺地域のごみ拾い

ごみ拾いそのものはグループメンバーだけで実施するものだったので、自分たち以外の人との対話や交流は想定していない活動でしたが、自分たちだけでなく近隣の皆さんも気持ちよく過ごすことができるようにという目的は共生社会に生きる者として大切な考えであると判断しました。実際に学習者がごみ拾いに出かけた際には、近隣の方にあいさつをしたり、されたり、「どこの国から来たんですか」と声をかけられたり、「ご苦労様、ありがとう」とお礼を言われたりしたそうです。たくさんのごみを拾い、想定はしていなかったけれども近隣の方とコミュニケーションをとることもでき、学習者は達成感を感じている様子でした。

### ②地域のマラソン大会に運営ボランティアとして参加

マラソン大会の運営スタッフに申し込んで、大会の準備と当日の運営に携わりました。自分たち以外の運営スタッフが日本人ばかりで初めは緊張したそうですが、すぐに打ち解け、大会終了後も連絡を取り合う仲間ができたそうです。大会の準備はすることがたくさんあって大変で、更に大会当日は雨が降ってきてしまい全身びしょ濡れでの活動だったそうですが、この活動で知り合った仲間とまた一緒に次のイベントに参加したいと言っていたのが印象的でした。

### ③区のボランティア・市民活動に参加

ボランティア・市民活動センターにアポイントをとって相談に行き、ボランティア活動を紹介してもらい（マッチングしてもらい）、その活動に参加しました。参加した学習者は、センターに電話で連絡をしたり相談に行ったりするのは勇気があることだったが、ボランティア活動は人の役に立つことができてよかったとのことでした。ただ、約束したボランティア活動の日は無断で欠席したグループメンバーがいたことで人数が減り、ボランティアを必要としている先方の方とセンターの方に迷惑をかけてしまったそうです。このグループは報告会でこの件について反省点として触れ、もしまた活動をする際にはあってはいけないことだと話したとのことでした。地域の人とどう信頼関係を築いていくか、どのようなことに気を付けなければならないのかを考えるきっかけになったのではと思います。

### ④自分たち外国人のことを知ってもらうきっかけ作り

地域の人に自分たち「外国人」のことを知ってもらうことでいい関係をつくることができるのでは？と考えたグループがありました。自分たちのことを知ってもらう第一歩として、中国語・韓国語・英語教室（グループメンバーの母国語）の開催を企画し実行しました。「おいしい」をそれぞれの言語でどう言うのかを提示し練習を促し、そこに中国や韓国の料理で何がおいしいか、といったように文化に関わる情報にも触れ、参加している日本人とやりとりをしました。参加者を募るのに苦勞をして教師の協力も得ながらではありましたが、報告会では、企画を実行することができ、そして日本人と交流することができてとてもうれしかったと笑顔で話してくれました。

他にも、学校近くのコンビニの店長さんと相談をして、外国人客に注意を促す翻訳付きのポスター（トイレの使用や店の前での喫煙について）を作成し貼り出してもらったグループや、外国人がその地域で生活するのに気を付けるべきことについて交番の警察官に話を聞きに行き、その内容をクラスメイトにシェアをしたグループなど、実行することができた企画は様々あります。その一方で、実行できなかった企画もありました。例えば、公園にいるホームレスの人達に食べ物を提供すること、子ども達に異文化に触れられる機会として自分の国の遊びや絵本を紹介することなどは、学習者の安全が確保できるかどうかという点やコロナ禍で対面での実施が難しいという状況などから実現できなかった企画です。実現が不可能ということになったとき、企画そのものを変更するグループもあれば、他の実現できそうなグループとの合併を申し出たグループ



プもありました。「できないから終わり」ではなく、じゃあどうするか学習者に問いかけ、教師も一緒に考えていきます。

### ここに注意

- Unit 3 の第3課は、学習者も教師も「実際に行動する」ことにはかなりのエネルギーを費やします。そのため、その「実行する」ことが終わると、達成感や安堵感を感じると思います。それはいいのですが、他の Unit と同様に「振り返り」が大切です。Unit 3 では報告会を設定しているので、それを通して自分たちが実施したことをまとめ、振り返っていきましょう。テキストの p.117 の 6 は実施直後に取り組めるといいと思いますが、その際⑥の質問については、多文化共生社会の一市民としてどう行動するか考えるというところからこの第3課が始まったことを思い出してもらい、実行したことが一度きりでよいものなのか、継続できるものなのか、継続したくてもできないのであればどうするかなど、今後について考える時間をとってください。
- 「活動の後で」でレポートを作成します。母国語でレポートを書いたことのある学習者はすぐイメージができるかもしれませんが、そういった経験がない学習者がいることも想定されます。レポートの基本的な構成や書くことの例を確認してから書く作業に入ってください。紙に書くのかパソコンを使って書くのかは、クラスの状況に合わせて設定しましょう。

ある学習者が、報告会で使用したスライドの内容をそのままレポートに使って提出しました。報告会の準備の段階で、スライドには長々と説明を書かないということに気を付けてきているため、その内容を写しただけのレポートはレポートらしからぬものになってしまいました。レポートの中にも、内容によっては箇条書きしたほうが分かりやすいという部分はありますが、しっかりと「文章を書く」ということを学習者に意識づけしてから書く作業を進めてください。

## Unit4

最終更新日 2024 年 5 月 1 日

### Unit4 のねらい

- 1 日本の文芸作品を読んだり聞いたりして、内容を理解し、感想を述べることができる。
- 2 物語などを通して、自分の考えを伝えることができる。

### Unit4 の概要

Unit 4 は少し趣向を変えて、「詩・俳句・短歌」と「物語」を取り上げました。言葉を使って、思いや心情を表すことに挑戦します。

第 1 課では、詩・俳句・短歌を楽しみます。

第 2 課では、物語を読んで、情景を描いたり、物語の後を考えたりします。

第 3 課では、実際に自分たちで物語を作ってみます。

### 進め方

#### 第1課 詩・俳句・短歌

##### Can do

詩や俳句や短歌を読んだり聞いたりして、楽しむことができる。

「詩」は言葉を並べることで情景が生まれます。言葉が少ないことでより多くの意味を感じることができます。

第 1 課では、まず、日本語で「詩」を楽しみます。

「プレタスク 1」の「かえる」は「かえる（蛙）」「かえる（帰る）」のようにアクセントによって意味が変わります。p.124 のひらがなで書かれた詩は読み方によって意味が変わるので、互いに読んで何が伝わったか、何を伝えたかったかを話し合います。

「プレタスク 2」では、自国の詩を朗読して、詩の内容を日本語で伝えます。それぞれの国の言葉の音を楽しみましょう。

「読んで考えましょう」では、著名な作者の詩、俳句、短歌を楽しみます。4 つ目の作品は、小学生の作品です。それぞれの作品を、解説を読んで楽しんでください。

「読んだ後で」では、学習者も日本語で「詩」「俳句」「短歌」を作ってみます。できた作品は互いに読んで味わってください。

## 第2課 物語「春の鳥」

### Can do

物語を読んで、その物語のメッセージについて考え、感想を伝え合うことができる。

第2課では、物語を読んで楽しめます。

「プレタスク1」では、物語「春の鳥」を読むのに必要な背景知識の確認をします。

「プレタスク2」では、自分の国の季節について確認をします。

「読んで考えましょう」では、物語を読んで、イメージできた情景を話し合います。紙芝居のように絵で表してみるといいでしょう。

さらに「聞いて考えましょう」では、春の鳥の物語を、白い鳥から見てどうだったか、白い鳥が見て聞いて感じたことを聞きます。聞いてわかったことについて話し合ってください。そのうえで、物語「春の鳥」が言いたいことは何か考えて、話し合ってください。

「読んで聞いた後で」は、読みの活動と聞く活動の後作業として、「春の鳥」のその後の物語を書きます。書けたら、互いに読み合って、感想を伝え合います。

終わったら、第2課を振り返って、目標のCan doがどれぐらいできるようになったかチェックをします。

## 第3課 物語作り

### Can do

- 1 ストーリーがよく伝わるように、工夫することができる。
- 2 聞き手を引き付けるような伝え方ができる。

グループで物語を作成し、発表します。

何を伝えるために、どのような物語にするかを考えます。キャラクター、ストーリーの展開、発表の方法、作成スケジュールなどを話し合って決めます。決まったら、作業に入ります。

作業計画を立てることも重要な課題です。

最後に、それぞれの作品を集めて、作品集にします。また、気に入った物語をそれぞれ伝えたいことが伝わるように音読します。互いの音読を聞いて、何が伝わったか話し合います。

「活動の前に」では、物語の構成を考えるために、自分の国の物語や日本の物語を読んでみて、その物語が伝えようとしているメッセージと構成を確認します。物語のストーリーを「起承転結」で捉えてみます。

続いて、「活動」では自分たちで物語を作ります。グループで、どんな物語を作るかを考えます。まず、物語で伝えたいことは何かを考えて決めたら、主人公を決めます。そして、主人公が何をするか、そしてどうなるか、などを考えて決めていきます。

構想ができたなら、ストーリーの展開を考えます。

さらに、どんな形で発表するかも決めます。

以上が決ったら、活動の流れを考え、制作スケジュールを決めて、活動を始めます。

物語の制作では、まずシナリオを作成します。

シナリオができたなら、発表の準備をします。話し方などしっかり練習をします。

発表会を行って、互いの作品について感想を伝え、評価をします。

自分たちの作品についても振り返りをして、自己評価をします。

「活動の後で」では、気に入った作品を一つ選んで、音読をしてみます。また、発表会で発表した作品を作品集としてまとめます。

最後に、第3課とUnit4全体を振り返って、目標のCan do がどれくらいできるようになったかチェックをします。

## 各課のポイント

### 第1課 詩・俳句・短歌

#### 進め方のポイント・アイデア

- 「かえる」の音読はぜひ教師も準備を！

第1課のプレタスク「かえる」の音読は、伝えたいことによって読み方が変わる、読み方を変えると伝わるのが違う、ということを体感できる活動です。個人の活動として実施することもできますし、グループ活動にしても楽しめます。様々な読み方が出てくるはずですので、聞いた人はどう聞こえてどう感じたのか、読んだ人はどんなつもりで何をポイントに読んだのか、話し合しましょう。

あるクラスで、グループごとに「かえる」の音読を発表して話し合いも終えたところで、学習者から「先生はどんな読み方をしますか？」と聞かれたことがありました。「先生のも聞きたいです！」とリクエストさ

れ、読むことにしました。実は事前に「かえる」の音読をいくつかのパターンで練習していたので、その時のクラスでは出てこなかった読み方をして聞いてもらいました。その読み方は2匹のかえるが会話しているように読んだものでしたが、学習者は「会話しているみたいだった」「友達に帰ろうと言っているのに断られていたみたいだった」「一緒に帰れないのは何か用事があるから？それともそのかえる（帰ろうと誘っているかえる）が嫌いだから？」と、どう聞こえたかを素直に、どう感じたかを想像力を使って話してくれました。「こんな読み方もあるんだなあ」と読み方のバリエーションの一つとして学習者が楽しんでくれた例です。

学習者は普段いろいろな場面で「日本人だったらどうするんだろう」と考えているようです。そのような興味や関心にこたえるためにも、教師も一日本人としてぜひ「かえる」の音読の準備をお願いします。と言っても授業の展開によっては披露する機会がないこともあり得ます。その場合は自分も練習してみて学習者の気持ちが分かってよかった、ということでご理解ください。

- 詩の朗読アンコール

プレタスク2は学習者の国の詩を紹介し合います。紹介する際は「母国語で朗読する」⇒「日本語で意味を紹介する」という流れになるかと思いますが、詩の意味が分かってから「〇〇さんの国の言葉でもう一度読んでください。聞きたいです。」という学習者の発言がありました。2回目の朗読を聞いた後は聞き手の学習者から「おお～」という声があがりました。意味が分かってからその言語の音を聞くと情景のイメージが浮かび、1回目とはまた違った味わいがあるようです。詩の世界観を伝えるために、ミニホワイトボードに絵（月と雲と山でした）を描いて朗読した学習者もいました。2回目の朗読も、絵を描くことも学習者全員が「すること」として設定しなくていいのですが、学習者がそうしてほしい、そうしたい、という時には活動の目的に合っていることであれば時間の許す限りは認め、学習者同士のやりとりがうまれるよう促すのがよいのではと思います。

- まさに「読んで考えましょう」

第1課の課題文には4つの詩・俳句・短歌があり、それぞれに解説文が続いています。課題文の最初から最後まで一気に読んでいくこともできますが、まずは4つの作品だけが見えるようにして読む時間をとり、学習者の解釈について先に話し合うのも楽しいです。言葉が少ないために「全然わかりません！かえるが水に入るのは普通のことですけど、どうしてそれを俳句にしたんですか！」という学習者がいたり、「寒いのにあたたかい？どうして？冬でしょ？あたたかくないです。」という学習者がいたりしました。その一方で「花は幸せのことだと思います。」「水の音を聞くと涼しい感じがして気持ちがいいです。」「この二人は絶対恋人になったばかりです。ラブラブの雰囲気です。」と自分の解釈を伝えてくれた学習者もいました。解説文を読む前にこのような時間をもつと、学習者の頭の中に「わからない」「～かもしれない」などの“もやもや”を作ることができます。“もやもや”は課題文を読む動機にもなり、学習者同士の話し合いをうむ種

にもなります。「読解」の基本的な進め方はあるにはありますが、課題文の内容によっては読み方をアレンジすることもいい授業のための工夫です。

上記のような読み方をした場合、「考えを広げましょう」では、それぞれの作品を最初に読んだ時にはどう感じたか、そして解説文も読んで内容の確認も終えた今はどう感じているかをまとめて話すことを課題にできると思います。

### ここに注意

- 「進め方のポイントとアイデア」にプレタスク1の「かえる」の音読について書きました。教師も音読できるように準備をしておきましょうということですが、これについては注意も必要です。教師がパフォーマンスを見せる際、それが「お手本」や「正解」として理解される可能性があることに気を付けなくてはならないと思います。発表や司会のモデルを見せたいという時には問題ありませんが、学習者の自由な発想を求める時には、教師が先に例を見せるとそれにとらわれてしまうかもしれません。例は一つだけではなく複数見せるとか、更に学習者と一緒に例を考える時間をもち、学習者の発想や発言を促しながら自由に表現していいのだということを伝えとか、工夫しましょう。

## 第2課 物語「春の鳥」

### 進め方のポイント・アイデア

- キャラクターと名前の関係  
「読んで考えましょう」で課題文を読み始める前に、タスクの確認をします。ここでは本文を読みながらウグイスがどのようなキャラクターなのか探り、ウグイスに名前をつけることが課題です。まず「キャラクター」が何を意味するのか確認しましょう。差し支えなければ学習者を数名選び、みんなでその学習者のキャラクターについて出し合ってみると、これからすることがイメージできると思います。また「名前をつける」ことについても、確認が必要です。名前には込められた意味や願いがあることを確認しておく、とんでもない名前は出てこないと思います。これも数名の学習者の名前の由来を聞いてみるのはどうでしょうか。

実際の授業では、キャラクターと名前を関連づける学習者もいれば、別々に考えた学習者もありました。いくつか紹介します。

	ウグイスのキャラクター	ウグイスの名前	理由
①	不満が多い（冬が嫌い、寒い、歌いたいのに歌えない）、未熟者（我慢ができない、一人で長く飛べない）	春巻（はるまき）	ウグイスは春の鳥だから「春」と、歌うために周りを巻き込んだから「巻」を合わせて「春巻」にした。
②	生意気（歌が上手だと自慢している）、臆病者（自分で今の状況を変えようとしていない）、世間知らず（他の場所について知らない）	サトシ	本文を読んでウグイスはまだ子どもで、男の子のイメージをもったので、日本のアニメに出てくる男の子の名前にした。
③	勇気がある（全然知らないところへ行こうと決めた）	アラム	時間を教える「アラーム」からつけた。 ウグイスは春を知らせる鳥だから。

上記のように、クラスで共有すると学習者のキャラクターの読みとり方が様々であることが分かります。また、キャラクターと名前が関連していてもそうでなくても構わないのですが、しっかりと理由を説明してもらいましょう。ウグイスに「焼鳥（やきとり）」という名前をつけたペアがありました。理由を聞くと「焼鳥はおいしいから」とのことでしたが、これは他の学習者が「それはちょっと…」 「この物語と関係ない」と反応し、そのペアは考え直すことになりました。理由を聞けば、本文を読んで考えた内容なのかどうか判断できるはずです。

## ここに注意

なし

## 第3課 物語作り

### 進め方のポイント・アイデア

- 「日本の物語」は何を選べばいい？

「活動の前に」で日本の物語を読んでもらう活動があります。学習者が読む物語は、教師が選んで提供することもできますし、学習者が自分たちで選んで読むこともできるでしょう。いくつかの物語を提示して、その中から選んで読んでもらうといったこともできます。その物語を選ぶポイントがいくつかあります。後の活動がしやすいように、メッセージのある物語・起承転結が分かりやすい物語・長すぎず短すぎず、難しすぎず簡単すぎない物語といったところに注意をして選ぶのがよさそうです。ですから、完全に学習者に任せて物語をインターネットで探して選んでもらうという場合、事前にポイントを伝えることはできますが、学習



者がその通りに選べるかどうかは分かりません。その結果、後の活動で教師側の想定とは違うことが起きたり、時間がかかったりすることも考慮しておく必要があると思います。

日本の昔話をいくつか用意して、そのタイトルを提示しタイトルそのものの意味を確認した後、学習者がグループで相談する時間をとり、自分たちが読む物語を選んでもらったことがあります。その時は「浦島太郎」「したきりすずめ」「つるの恩返し」を準備しました。学習者は分からない言葉や表現があると自分たちで調べて読み進めましたが、昔話だからこその言葉や表現に触れることも楽しんでいました。同じ「浦島太郎」でも、探してみると文字量がそこそこ多いものもあればコンパクトに短くまとまっているものもありました。学習者の日本語力に合わせて、分からない語句を少し調べる程度で読めるものの方がいいと思います。

- 図を使ってアイデアを可視化する

「活動」ではグループで物語を創作します。テキストの p.141 の<sup>1</sup>で図を使ってアイデアを広げ、<sup>2</sup>でそのアイデアをまとめていきます。グループでアイデアを出し合う際は、物語を通して伝えたいことやメッセージから考えても、メインキャラクターから考えても、何から考えても構いません。学習者にはテキストにある5つの丸に限らず、どんどん図を広げていいと伝えましょう。ダウンロード教材があるのでそれを使っただけでもいいです。また、枠ありきで活動してもらうのではなく、最低限考えてほしい項目は提示して、A3サイズの白紙の紙をグループに1枚ずつ渡して自由に書いてもらってもいいと思います。

- どう発表するかもグループで決める

テキストの p.143 に発表方法の例として「紙芝居」「演劇」「朗読」を出しました。それぞれ実際に学習者が取り組んだ発表方法です。

「紙芝居」グループは、紙に絵を描いて、それを使って発表するつもりで準備を進めていましたが、途中でクラスみんなに見てもらうにはサイズが小さいということに気が付きました。そこからまたグループで相談して、絵をスキャンしてデータ化し、モニターに映し出して発表することにしました。もともと手描きの絵なので、柔らかく温かみのある発表になりました。絵が得意な学習者が、タブレットを使って絵を描いたケースもあります。「絵本」をイメージしたそうで、絵に加える文字のバランスに悩みながら作成していました。学習者には教師が想像している以上にパソコンスキルが高い人もいます。その能力を十分に発揮してもらっていいのですが、著作権には注意するよう繰り返し伝えましょう。

「演劇」は、はじめから演じて発表しようと考えたグループもあれば、「絵が得意な人がいない、どうしよう!？」というところからの方向転換で演劇に決めたグループもありました。簡単な小道具を作ったり、背景として使えるようなイラストや写真のフリー素材を探したりという準備をしていました。あるグループは練習を始めようとした時にグループメンバーだけでは登場人物とナレーターを合わせた人数に足りないことに気が付き、物語はもう変えられないからと急遽他のグループのメンバーに助っ人を頼んで演劇に加わってもらうことにしました。頼まれた学習者は自分のグループの発表準備もあり「えー!!」という反応でしたが、強く強くお願いされ、最後には引き受けました。このグループは授業時間が終わってからでも練習が必要

で大変そうでしたが、発表の最後にはその協力してくれた学習者にきちんとお礼を述べ、協力した学習者が笑顔でそれを受け入れた様子を見て、聞き手からは大きな拍手が起こりました。授業活動を通して学習者同士のいい人間関係が築けた例です。

「朗読」を選んだグループは、読書好きな学習者が集まったグループで、聞いている人が小説を読んでいるような感じにしたいということでした。物語を縦書きで綴ったスライドを作成し、それをモニターに映し出して朗読しました。イラストや写真は一切なかったのですが、内容がそう複雑ではなかったことと文字があったことで聞き手にはしっかり伝わったようでした。聞き手の学習者の感想に「日本語の小説を読んだ気分」とあったのを見て、コンセプト通りの発表ができたメンバーが喜んでいました。

他にも方法は考えられます。準備にかけられる時間、使える備品や設備などに限りはありますが、発表方法にバリエーションがあると発表を見る方も気分や視点が変わって楽しめると思います。

- 作品を味わって、残す

「活動の後で」では、まず好きな作品を音読することでその作品を味わいます。音読練習をするのにシナリオのままでは読みにくい場合、シナリオを原稿化する作業が必要になるかもしれません。原稿に書き直す場合でも、シナリオのまま読むという場合でも、音読練習に入る前の最終的なチェックは教師の役割です。間違っただけの文章を学習者が何度も練習して読むということがないように、文法や表現のおかしいところはないか、意味不明なところはないか、確認しましょう。

また、学習者が音読練習を始めるまでにモデルの音声を作成しておくといいと思います。物語がいくつもあって大変かもしれませんが、他の教師にも協力してもらうなどしてぜひ録音してみてください。実際の授業で学習者に練習で使ってくださいと録音データを渡したところ、とても喜ばれました。授業時間内だけでなく、通学中もそれを聞いてくれた学習者もありました。今はスマホで簡単に録音ができますし、データの共有も難しくないのでお勧めです。

音読をした後は作品集を作ります。冊子にしても、データ化してもいいでしょう。完成したらそれをお披露目できる場所や機会をつくって、読んだ人や見た人からの感想がもらえたりすると更に活動を発展させることができます。初級クラスでお世話になった先生方や似たレベルの他のクラスの学習者に読んでもらう、学校のHPやSNSに掲載してもらう、学校の図書室やカフェテリアに冊子を置いてもらうなど、教室外に発信する方法は様々あります。ぜひ学習者と話し合ってみてください。

## ここに注意

- ここまでに何度か著作権について触れてきましたが、Unit4でも注意が必要です。「活動の前に」の2番は日本の物語を読んでみようという活動ですが、所属機関によって学習者に提供できるものや提供方法に違いが出てくると思われます。事前に確認をお願いします。また「活動」でも、物語を伝えるのにイラストや写真が必要になることが多いでしょう。教師はグループ活動の様子をしっかりと観察し、学習者が使おうとしているイラストや写真がどのようなものなのか確認をしてください。

## Unit5

作成日 2024 年 1 月 9 日

### Unit5 のねらい

ライフスタイルについて説明をしたり意見を述べたりすることができる。

### Unit5 の概要

新しい社会でどのように暮らしていくのかを考えます。

特に、働き方について、データをもとに考えます。国や文化が異なれば、働き方や仕事に対する考え方なども異なります。自分のこれまでの生活スタイルを変えないようにするのか、それとも、日本のスタイルに合わせるのか、異なる文化をもつ社会でどのように生きていくのかについて考えます。

この Unit では、データの扱い方、データを分析して考えることやわかったことをどう報告するかについても学びます。

第1課では、データをもとに、日本人がどんな働き方をしているのかを考えます。

第2課では、「生き方を考える」というタイトルで、生活の中で、仕事と自分の生活のバランスをどのようにとっていきたいかを考えます。

第3課では、日本人のライフスタイルについて知りたいことを、インタビューをしたり、アンケート調査をしたりして、調べて、結果をまとめて報告します。

### 進め方

#### 第1課 働き方を考える

##### Can do

働き方に関する簡単な文章を読んで、理解することができる。

働き方は、日本社会の中で世代によっても人によっても異なりますが、どんな働き方があるかを理解していることはその社会で生活するうえで重要なことです。

「プレタスク」では、働き方について自分の考えを確認します。

そして、「読んで考えましょう」では、ある会社で働く人の休みの取り方と働き方に関する考えを読みます。参考資料としてグラフが付いています。タスクは、文章を読んで、この文章を書いた人の考え方を読み取り、それをもとに、今後この人がどれぐらい有給休暇をとるか推測することです。

その後、「読んだ後で」では、自分はどんな働き方がしたいか考えて、書きます。書けたら、学習者同士で読んで、感想や評価を書きます。

自分でも読み直して、自己評価をします。

## 第2課 生き方を考える

### Can do

グラフの情報をもとに、日本人の生き方や働き方について理解を深めることができる。

第2課は、生き方を考えるとともに、グラフを読んだり、グラフを説明したりすることができるようになることが課題です。

「プレタスク1」では、棒グラフを見てわかることを話し合います。

「プレタスク2」では、折れ線グラフと円グラフを見てわかることを書きます。さらに、日本の人口の推移のグラフを見て、わかることを説明しますが、そこで、グラフや表を説明するときの表現を学びます。

「読んで考えましょう」では、表とグラフを見ながら、働く目的は何か、どのような仕事が理想だと思うかについての説明文を読みます。課題は、この説明文のタイトルを考えることです。

「聞いて考えましょう」では、日本の将来の人口の推移について、グラフを見ながら説明を聞きます。聞いてわかったことを学習者同士で話し合って、聞き取りを進めます。

さらに、「読んで聞いた後で」では、仕事と私生活のバランスというテーマについて、円グラフのデータをもとに自分の考えを書きます。

## 第3課 ライフスタイル

### Can do

生活習慣や生活に関する話題について、自分が得た情報をグラフなどを使ってわかりやすく伝えたり、自分の考えを述べたりすることができる。

第3課では、日本人のライフスタイルについて調べて、その結果を発表します。発表では、グラフや表を使って、データをもとに説明をすることが課題です。

「活動の前に」では、日本の生活習慣について日本人の考え方を調べるために、自分たちが気になることは何か考えて、それに関する記事や映像を探します。それをもとに、自分たちが詳しく知りたいことは何か、話し合います。

「活動」では、「活動の前に」で話し合ったことをもとに、グループで日本人のライフスタイルに関する調査をします。まず、何について、どのような調査を行うかを話し合います。

そこが決ったら、より詳細に調査の方法を決めます。続いて、活動の流れを決めて、スケジュールを立てます。テキストでは、インタビュー調査の際の進め方と話し方の例、アンケート調査の際の進め方と話し方の例と気を付けることを示しました。しっかり練習をしたうえで調査をするようにしてください。

調査したら、その結果をまとめます。そして、その結果からわかることを書きます。さらに、そこから考えたこと、調査前の予想との比較を書きます。

それらについて、発表をします。発表はスライドを使って行います。互いの発表を聞いて、わかったことを確認したり、質問をしたり、感想を述べたりします。

発表を聞いた後で、感想と評価を書きます。

自分たちの発表を振り返って、自己評価をします。

「活動の後で」では、調査した内容を報告するレポートを書きます。レポートは、序論、本論、結論という構成で書きます。書く内容を整理してから書きます。書けたら、互いに読み合って、感想と評価を書きます。自分のレポートについても振り返って、評価をします。また、活動を通して気づいたことも書いておきます。

最後に、第3課とUnit5全体を振り返って、目標のCan do がどれくらいできるようになったかチェックをします。

## 各課のポイント

---

(後日公開予定です)